

ご あ い さ つ

年度末をひかえ、会員の先生方にはお忙しい日々をお過ごしのことと思います。日頃は三好教育会振興のために、温かいご理解とご支援をいただいておりますことに心からお礼申しあげます。

平成 24 年度から研究主題を『未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成』とし、三好地域の子どもたちが、ふるさとの自然や人とのふれあいを大切にしながら、自分たちの未来を切り拓き、たくましく生きる力を育成することをめざし研究を重ねてまいりました。

26 年・27 年度は、箸蔵小学校、三野中学校に研究を深めていただき、その成果を平成 27 年 8 月 20 日の「三好教育研究発表会」でご発表いただきました。

- 自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成
～地域との交流を通してふるさとの魅力再発見～

箸蔵小学校 教諭 藤原 隆司

- 出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて
～識字学級との交流を通して～

三野中学校 教諭 尾形 君代

三好地区では、過疎化、少子高齢化が年々進み、地域社会や家族関係も変容してきています。このような時代に子どもたちをどう育てていけばよいのか、どのような力を子どもたちにつけていけばよいのかということが今わたしたちに問われています。教育には、どんなに社会が変化しようとも時代をこえて変わらない不易の部分があります。子どもたちに未来を生き抜く生きる力をつけるため確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた教育がより一層重視されなければならないと考えます。そのためには、学校・家庭・地域社会が情報を共有し連携して取り組んでいくチーム学校としての取り組みが重要となってきます。発表校の日々の取り組みは、家庭や地域とともに学校づくりを実践し、人々とのふれあいの中で豊かな感性を育てたり、体験を通した学びから人権意識を高めるすばらしい実践報告でした。発表校のご労苦に対しまして心から敬意と感謝を申しあげます。

また、発表会の後には、2004 年 4 月から 2008 年 3 月まで高知県教育長として活躍され現在は「たんぽぽ教育研究所」所長の大崎博澄氏に「生きる力を育む教育」と題してご講演をいただきました。生きる力を育むために「子どもに何をさせるか」「子どもたちにどう向き合うか」「親は何をすべきか」「学校・教師は何をすべきか」などについて具体的にお話しをしてくださり、わかりやすくたいへん有意義な講演でありました。この研究紀要は各学校 1 部ずつ CD 化して配布させていただくとともに三好教育研究所ホームページにも掲載をいたしています。ご活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが、本研究紀要発行にあたりご指導・ご助言いただきました先生方、研究協力校（園）および関係各位に心よりお礼申し上げますとともに、会員の先生方のますますのご活躍をお祈りいたします。

平成 28 年 3 月

三好教育会長 川人 正恭

目 次

あいさつ

三好教育会 会長 川人 正恭

———— 研究指定校研究 ————

- 「自分で気づき，考え，実行し，仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成」……1
～地域との交流を通してふるさとの魅力再発見～

箸蔵小学校 教諭 藤原 隆司

- 出会いをつなぎ，自己を見つめ，自他の人権を尊重する生き方を求めて……12
～識字学級との交流を通して～

三野中学校 教諭 尾形 君代

———— 教育研究所研究員研究 ————

- 「読む 知る 感じる」 読書環境をめざして……23
～学校図書館教育の実践と課題～

三好教育研究所 研究員 加藤公夫

- 児童・生徒の生活環境の改善を目指して……43
～ネット端末（スマホ等）の使用時間を見直して～

三好教育研究所 研究員 井川 秀樹

- 既刊『研究紀要』の内容一覧（平成元年～）……55

研究主題

「自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成」
～ 地域との交流を通して ふるさとの魅力 再発見 ～

三好市立箸蔵小学校 教諭 藤原 隆司

1 本校の概要

(1) 学校・校区の様子

本校は、徳島県の西部、名利箸蔵寺のふもとにあり、全校児童66名の子どもたちは、鮎苦谷川沿いののどかな、緑と清流に囲まれた自然の恵み豊かな地域の中で、生き生きと活動している。箸蔵地域は「博愛の里」と呼ばれ、近隣に池田支援学校、池田学園、箸蔵山荘等があり、住民の多くが、各施設に勤務している。また、地域のボランティア



箸蔵小学校

団体などが一体化した「箸蔵福祉村」として、子どもたちを含めた地域住民が様々な活動に積極的に参画している。本校の特色として、地域とのかかわりが深く、学校は「ともに支え合う地域づくり」の実現を、地域諸団体とともにめざしている。そのような中で、本校では伝統的に、地域の諸団体とともに「地域の人々とのふれあい」「地域の自然とのふれあい」「地域の諸施設とのふれあい」等を通して、子どもたちが豊かな人間性を育ていけるように支援し、取り組みを重ねている。特に、本校教育活動の柱の一つとなっている池田支援学校との交流学習は、長年の歴史があり、人権尊重の精神や豊かな感性を育てることを、大きなねらいとして交流を進めている。このような経緯を踏まえ、本校では、「自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもを育成する」という教育目標を掲げ、教育課題である「学ぶ意欲」や「体力の向上」等をめざして、全教職員一丸となって日々の教育実践に取り組んでいる。



池田学園



箸蔵山荘

(2) 教育目標

「自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもを育成する。」

(3) めざす子ども像

○進んで学ぶ子

☆基礎・基本の定着 ☆自ら学び、考える

☆コミュニケーション能力の育成

○思いやりのある子

☆命や人権を大切にする ☆地域を愛する心の育成

☆あいさつ運動

○健康でたくましい子

☆体力づくりの推進 ☆安全教育の充実 ☆基本的生活習慣の定着



箸蔵小学校児童・教職員集合

2 本校の教育活動の特色

地域は子どもたちにとってごく身近であり、絶好の遊び場である。しかし、最近の子どもたちは自分が地域に生まれ、地域に育っているという意識をそれほど持たず、ややもすると地域に無関心になりがちな傾向がある。そこで、本校では伝統的に、地域の力を借り、地域の素材を生かして、地域を教材化していく取り組みを行っている。

①地域の人々とのふれあいを通して

②地域の自然とのふれあいを通して

③地域の諸施設とのふれあいを通して

の三つの枠組みを設定し、ヒトやモノとのふれあいを通して、

自己課題を設定できるようにしている。自己あるいは自己と他者

とのかかわりへの気づきや自己の生き方への省察から、他人を思

いやる心や感動する心など、豊かな人間性をはぐくむことをねらいとして実践している。池田支援学校等、地域の施設との交流は、本校の人権教育を進める意味において大きな位置をめている。



池田支援学校との交流

3 副主題「地域との交流を通して ふるさとの魅力 再発見」について

(1)ねらい

学校・家庭・地域が一体となり、

①子どものコミュニケーションに不可欠な『伝え合う力』を育成する。

②自分たちの暮らす地域（ふるさと箸蔵）のよさや魅力を再確認する。

③子どもの育成を中心とした地域コミュニティを活性化する。

の3つをねらいとした体験活動を推進している。

(2)体験活動で期待できる効果

①体験活動を通じた児童の学習意欲の向上。

②全国的な課題である「伝え合う力」の高まりと活用する力の向上。

③箸蔵の文化等、様々な地域の特色に触れ、地元箸蔵に誇りを持つ子どもが育つ。

④学校での取り組みが地域、保護者へと広がり、地域全体で子どもに目を向け育てていこうとする機運が高まる。

の4つの効果を期待して、体験活動を推進している。

4 本校の取り組み

(1)地域の人々とのふれあいを通して

①三世代交通安全教室並びに三世代交通安全パレード

本校では、毎年5月末に三世代交通安全教室を実施している。保護者・地域住民・箸蔵福祉村・箸蔵治安の会・箸蔵青少年健全育成会・三好警察署・三好交通安全協会といった、多くの地歩行練習や自転車実習、自転車点検に取り組んでいる。地域の方が参加し、毎年児童と共に横断歩道の渡り方などの歩行練習や自転車実習、自転車点検に取り組んでいる。



交通安全教室

警察署の方のお話やPTA会長による宣言文の発表など、児童、保護者、地域が一体となって交通安全について考える機会になっている。この事前指導として、交通安全読本を活用し、自転車の点検の仕方や道路標識等についての学習はもちろんのこと、事後活動として、参加して下さった地域の方々や警察署の方々にお礼の手紙を書き、自分たちの町の安全は地域の多くの方のおかげで成り立っていることに感謝の気持ちがもてるように支援している。



交通安全教室

子どもたちのお礼の手紙の中に、「たくさんの地域のみなさんが参加してくれて、うれしかったです。」「地域のみなさんや警察のみなさんが、やさしく声をかけてくれてうれしかったです。」「校外に出て、歩行練習や自転車実習を行っている時に、地域の方々や警察署の方々がやさしく丁寧に教えてくださって、すごく感謝しています。」「登下校の時、たくさんの地域の方々が、見守ってくださり、とても感謝しています。地域のみなさんのおかげで、私たちは安全に生活できているのだと思います。」などの言葉が書かれており、地域の方々と交流することにより、地域の方々とのふれあいの大切さや、感謝の気持ちが育っていることを実感している。



児童お礼の手紙

また、9月末には4年生、5年生、6年生による鼓笛隊の演奏を先頭に、三世代交通安全パレードを実施している。保護者や地域の方と一緒に啓発活動をするることにより、交通安全に対する意識を深めることができている。



交通安全パレード

②博愛まつり・箸蔵町民運動会・箸蔵ふれあい祭りへの鼓笛隊参加

地域の行事である、「博愛まつり」・「箸蔵町民運動会」「箸蔵ふれあい祭り」に鼓笛隊が参加し、地域の方々との交流を深めている。この活動を通して、地域のみなさんから賞賛され、子どもたちの自信にもつながっている。子どもたちは、三世代交通安全教室や三世代交通安全パレード、また地域の行事に参加することにより、地域の人たちが協力して自分たちの生活を見守ってくれていることを再認識することができている。登下校時にスクールガードの方に感謝の気持ちをこめて大きな声であいさつをすること等、これからも見守ってくれている人に感謝の気持ちをもって生活していくことができるように継続して支援していきたい。



博愛まつり



箸蔵町民運動会



ふれあい祭り

③三好高校との交流

【三好高校生による読み聞かせ】

三好高校生が、読み聞かせに来校してくれている。担当学年の実態を考慮しながら、丁寧に読んでくれるため、小学校の子どもたちも読み聞かせの時間を大変楽しみにしている。子どもたちは、読んでもらった本を再度読み返したりするなど、本に対する興味を高めている様子が伺える。また、本の感想だけでなく、お兄さんやお姉さんへのメッセージを手紙に書いて送ったりするなどし、交流を続けている。



三好高校生の読み聞かせ

【芋の苗植え・芋掘り体験】

三好高校生の指導のもと、いも苗の植え付けやいも掘り体験を通して、三好高校との交流を深めるとともに、栽培活動を通して、豊かな心を培わせている。また活動後、お礼、質問の手紙や招待状を書くことで、自分の気持ちを言葉で伝える力の伸びを実感した。また、高校生から手紙の返事を頂き、体験時の語り合いでの交流と違い、形として残る物を得たことで、伝え合うことの喜びや意欲がより深まった。



芋の苗植え体験

地域にある高校との交流を通して、互いに親しみがわき、三好高校祭（楓祭）では、交流でお世話になった高校生や先生を見つけ話しかけたり、遠足で行った三好高校山地農場の動物の様子を教えてもらったりし、「箸蔵のよさ」を実感した。

地域住民が毎年楽しみにしている行事の一つといえる三好高校祭へ、交流がきっかけで個人的に参加する子どももあり、子どもも地域活性化の担い手であることを再確認した。



芋掘り体験

(2)地域の自然とのふれあいを通して

①ふるさと探訪

4年生が、地域の「互久楽会」のみなさんに教えていただきながら、ふるさと（箸蔵校区）に残る文化遺産を訪ね、先人の知恵や業績にふれるとともに、探訪を通して地域の方との交流を深めている。



八幡神社見学

【伝え合う力をつけるために】

ふるさと探訪で学んだことを班でまとめ、班ごとにクラスで発表を行った。その際、班員相互や班どうしの協力・教え合いの場面が多く見られた。また、「互久楽会」の方々を招いて、発表会を行うなど、発表の場を何回も設定することで、経験を積み、自信を持って発表できるようになった。



地域のみなさんを招いて

【箸蔵のよさの認識・発見するために】

身近にある文化遺産の歴史的な背景を知ることができ、感激した子どもが多くいた。今までは、子どもたちにとっては今現在の箸蔵のすがたが全てであったが、これからは、自分たちの親や祖父母が子どもであった時代に目を向ける素地ができたと考えられる。

【地域活性化へのつながりのために】

箸蔵地区は、子どもの教育に対する関心が高い。特に、お年寄りの方は、度々学校に足を運んでくださり、行事のお手伝いやゲストティーチャーとして活躍する人がたくさんいる。

また、下校時に「子どもの安全を見守る会」も組織されている。そういう方達とふだんのあいさつを交わす子どもは多い。しかし、今回のように、ともにたくさんの時間を過ごし、お年寄りの方々の子ども時代の話や話を直接聞くことにより、更に親近感も増し、今後の交流に大きなプラスとなると考える。



大具の渡し見学



地域のことを知ろう

②米作り体験

5年生が、地域の「じゅうやく会」のみなさんに教えていただきながら、学校近くの水田でもち米作りを行っている。

【もみまき体験】

5月の下旬にもみまき体験を行い、もみまき機を使って苗箱に種もみをまいた後、水をたっぷりあげてからシートをかぶせた。種もみを隙間なく蒔くことや土でしっかりともみを隠すことなどのコツを教えていただいた。



もみまき体験

【田植え体験】

もみまきから約2週間後の6月上旬に田植え体験を行った。じゅうやく会の方に1人ずつ機械の操作方法を教わってから田植え機を運転したり、手植えで苗を植えたりした。子どもは、「手植えは時間がかかるけど、機械は早いなあ。」と違いを体で感じる事ができた。



田植え体験

【稲刈り体験】

10月上旬には、稲刈り体験を行った。稲刈りもそばで見守っていただきながら1人ずつバインダーを運転させていただいたり、鎌で刈り取ったりした。刈った稲ははぜ掛けを行い、たわわに実った稲の重みで、米作りが重労働であることを知ることができた。



稲刈り体験

【脱穀・粃すり体験】

刈り取った稲の天日干しを約2週間行い、10月下旬に、はぜ掛けをしていた稲を外して脱穀機にかけたり、粃すり機に粃を入れたりする体験を行った。子どもは袋詰めにしたお米を見て、たくさん収穫できたことを実感していた。また、田んぼに落ちている稲穂を拾って大事そうに機械に通す子どももあり、1粒1粒を大切に作る気持ちをもてた。



脱穀・粃すり体験

【お米の発表会&お茶会】

オープンスクールの日に、じゅうやく会のみなさんを招待し、米作り体験で学んだことについてプレゼン発表を行った。また、米粉を使ったクッキーを作り、お茶と一緒に出しし、おもてなしをしながら交流した。発表では、聞き手を意識しながら分かりやすく伝えようと工夫したり、慣れない手でお茶を入れたりする姿が見られ、精一杯のおもてなしをすることができた。



「じゅうやく会」のみなさんを招いて

【ふれあいもちつき大会】

12月中旬に米作り体験の最終章として、じゅうやく会の方と保護者の方にお手伝いいただき、もちつき大会を行った。前日には米洗いの手ほどきを受け、冷たい水でお米研ぎもした。そして当日は、もちをつくだけでなく、丸めたり運んだりする仕事も積極的にこなすことができた。



もちつき体験

③フラワーガーデンづくり

地域にあるボランティア団体「箸蔵でんがく会」の方々と協力しながら、フラワーガーデンづくりを行い交流を深めている。自然とふれあいながら、「箸蔵でんがく会」のみなさんの優しさや協力心を再確認したり、友達と協力して活動を行ったりすることで、自然を愛し、大切に守り育てていこうとする態度を育てることができている。また、保護者や地域住民の方々に対して、地域の緑化運動、奉仕活動の有効な動機付けとなっている。



フラワーガーデン



「箸蔵でんがく会」のみなさんとのフラワーガーデン作り

(3)地域の諸施設とのふれあいを通して

①池田支援学校との交流学习

本校では、「池田支援学校との交流をととして、障がい者に対する正しい理解を深め、ともに生きようとする実践的な態度を養い、人権尊重の精神や感性を育てる。」をねらいとして、歩いて5分くらいの所に在る池田支援学校との交流を行っている。

交流の形態は、次のようになっている。

【交歓学習】

○箸蔵小学校6年生と池田支援学校小学部児童全員が、1年間を通してペアの友だちと交流活動を行い、関わりを深め、ともに知り合う。

○各学期1回、いずれも、池田支援学校で行う。

○事前に、業間交流を行いお互いを知り合う。



魚つりをしよう



誕生日カレンダー作り



星座を作ろう

【学年間交流】

○両校のほぼ同学年の子どもとの交流。(1年、6年以外)

○年2回交流活動を行う。(どの学年も同日に行うため、実施場所は話し合いで決める。)



列車ごっこ



バルーンで遊ぼう



息を合わせて

【支援学級の交流】

○支援学級に在籍している子どもが支援学校に行き、交流を行う。

○自立活動、音楽、体育の学習を一緒に行う。



力を合わせて



お絵かき楽しいね



風船バレーボール

【業間交流】

○本校は、毎日「わくわくエクササイズ」と題して、業間体力づくりを5分間行っている。その活動に、週に1度池田支援学校の児童が来校し、参加したり、その後、遊具遊びをしたりして日常的に交流ができるようにしている。



池田支援学校のお友達と

【授業交流】

○週に1度池田支援学校の一部の子どもが来校し、清掃や3・4年生の体育の学習を一緒に行う。



ラダーを使って



鉄棒運動



ハードルを使って

【職員間交流】

○年度当初の顔合わせ ○交流前後の打ち合わせ ○学校見学 ○研修会等の参加

これらの交流を通して次のような成果が見られた。初めて交流を始めた2年生段階では、前もって担任から学校の様子や接し方について話を聞いていても、活動を自分だけが楽しんでしまったり、話しかけることもできないままだったりする子どもも少なくない。しかし、回数を重ねるうち、学年が進むにつれて、接し方にも慣れてきて、「授業交流」や「業間交流」では、楽しい活動をとともにすることで、声を掛け合い順番を代わりったり、助け合ったりして交流が深まっている様子が見られた。

そして、6年生の「交歓学習」になると、どうしたら相手に喜んでもらえるか、一生懸命考えることができおり、難しい活動内容の意見が出た時にも、「こうすればできるよ。」といった工夫する意見も聞かれるようになった。

このような交流を通して支援学校の児童と接する中で、その子に応じた活動を考えることができるようになり、そのことから、自分たちのクラスの中にいる障がいのある友だちのことに、目を向けて考えることができるようになってきている。また、「支援学級の交流」では、同じ障がいのある友だちと関わることで、同学年ではなかなか味わえない活動の喜びを味わい活躍の場を広げた。池田支援学校との交流は、子どもだけでなく私たち職員も支援学校の先生方と触れ合う機会があることで、いろいろなことを教えて頂いたり、意見交換したりして、貴重な研修の場となっている。



星座を作ろう



カレンダーを作ろう

②箸蔵山荘との交流

3年生は、箸蔵山荘という地域の障がい者支援施設と毎年交流を行っている。主な交流としては、春から夏にかけてに行う「ひまわりプロジェクト」と秋から冬にかけて行う「そば体験」の2つの活動が挙げられる。

種まき、収穫、その後の加工作業など、箸蔵山荘の方々に教えていただきながら、作業を体験する。施設の方との交流を通して、一緒に作業する楽しさや自分からかかわっていかうとする意欲、自分からかかわっていかうとする意欲などをもたせたいと考えている。



ひまわり種まき体験

【「そば体験」について（秋～冬）】

9月にそばの種まき、11月に刈り取り、12月にそば打ち体験を行うなど、施設の方に教えていただきながら楽しく活動を行った。たねから育て、そばという食品になるまでの過程で子どもには多くの気づきがあった。そばの花が白く小さくかわいらしいことに喜び、収穫してから実の乾燥や選別などの今までに知らなかった工程があることに驚いていた。また収穫した実を粉にするまでのたくさんの行程に、たいへんさを感じ取っていた。

交流のはじめには、施設の人に対してなかなか自分から話しかけられなかった子どもも、一緒に活動をするにつれて、次第に自分から進んで話しかけることができるようになってきた。今では、町で出会った時に、気軽にあいさつを交わすことができている。また、教職員も、子どもたち同様に、あいさつを行い、言葉を交わし合って交流を深めている。施設に足を運んだり、話をしたりする中で、施設についての理解も子どもたちなりに深まってきており、障がい者に対し偏見意識もなく、働くことのたいへんさを素直に感じ取ることができている。



そばの種まき



そば刈り取り



そば打ち体験

③永楽荘・秋田ハーモニーの訪問

幼稚園児・１年生・４年生が、地域にある「特別養護老人ホーム」（永楽荘）・「介護老人保健施設」（秋田ハーモニー）を訪問し、劇や歌やダンス、また、肩たたきなどを行って交流を深めている。入所している方は、子どもたちとのふれあいを、とても楽しみにしてくださっている。訪問の際には、すごく歓迎してくださるので、子どもたちもその思いをはだで感じる取ることができている。



秋田ハ一モ二一訪問



永樂莊訪問

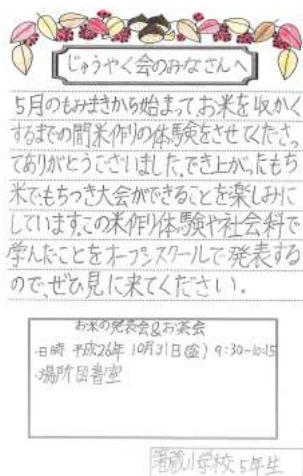


永樂莊訪問

5 成果と課題

今回の発表を受けるにあたって、教職員で様々な話し合いがなされた。その中でも、「今、本校で取り組んでいる交流学習・体験活動を、いかに『言語活動の充実』や『知識・技能を活用する力』や『伝え合う力』の育成につなげていくか」ということが、取り組みの成果をあらわす重要な鍵になることを全教職員で共通理解し、実践活動を行っている。

具体的な取り組みを概要で示してきたように、交流相手に感謝の気持ちを表す「お礼の手紙」を書く活動や体験活動の成果を地域の方々に伝える活動などを意識して積極的に行っている。また、双方向の交流という観点から、交流相手からの「感想・意見」をいただくことで意欲付けとなり、さらに次の活動につなげていくことができている。目的意識を持って取り組んでいる交流・体験活動は、箸蔵の子どもたちの「伝え合う力」の育成につながっていると確信している。



招待状



元氣で新しい年を迎えたことと思います。お餅は好きですが自分で観察しながら茹でたことなど生きている多くの事に分かれて花を咲かせながら暮らしていき、その間病気や害虫に負けて死なされて刈り取られ、脱粒され、もみすりされて、お米になる(玄米、げんまい、白米)は、くわがったことと思います。それから精米して(白米)は、くまはくま、ご飯にして食べるお米が、うるち米、餅などに加工して食べるお米が、もち米です。桶米、桶米作りの風習でした。

さてよいよい四月六日は小学校の最高学年しつかり頑張ってきたよいよい四月六日は(暦こよみ)の上で春の入り年間を通して一番寒い時期になりました。風邪(かぜ)など引かないよう、元気に学校生活を楽しく送ってください。

平成二十四年一月十一日



支援学校のみなさんへ



地域の方からのお礼のハガキ・手紙

(1)成 果

- 地域交流を中心に、体験活動を通した子どもの学習意欲が向上し、自分で考えて行動できるようになってきている。
- 箸蔵地域のヒトやモノとのふれあいを通して、「伝え合う力」が高まり、各教科において活用する力の向上がみられた。
- 「ふるさと探訪」「箸蔵寺見学」等、箸蔵の文化や様々な地域の特色に触れ、地元箸蔵に誇りを持つ児童が育ちつつある。
- 「箸蔵オープンスクール」等を通した学校での取り組みが地域、保護者へと広がり、地域全体で子どもを育てていこうとする機運が高まった。「箸蔵のよさ」が再発見できた。



支援学校との業間交流



箸蔵寺見学



老人施設訪問



支援学校との交流学习



ふるさと探訪



米作り体験

(2)課 題

- 地域との交流学习や各施設との体験活動が、系統性を考え、より効果的に教育課程に位置づけることができるような体制づくりが必要である。
- 地域交流に欠かせないネットワークづくりの核となる人材を育てていくことが急務である。
- 自力解決能力や表現力が乏しい児童が少なくないのが現状である、地域交流を中心に、体験活動を通して、自力解決能力や表現力の向上を一層図っていきたい。

6 終わりに

地域との交流学习・体験活動は「箸蔵に生きる子どもたち」には欠かすことのできない大切な学びである。今後も、「ふるさと箸蔵を大切にする気持ち」に誇りをもち、ともに支え合う地域づくりのための一員として活躍できる子どもを、学校・家庭・地域が手を取り合って、ともに育てて生きたい。

研究主題

出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて
～識字学級との交流を通して～

三野中学校 教諭 尾形君代

1 はじめに

本校は、三好市東部の吉野川北岸に位置する、生徒数118名の小規模校である。自然環境に恵まれた昔からの農業地域で、平野部には田畑が広がり、町の北部を徳島自動車道が横断している。

ふるさと定住事業による他町村からの転入者によってこれまで著しい生徒数の減少はみられなかったが、ここ数年はその影響も薄れ、ついに今年は学級数の減少となった。

生徒たちは、明るく素直で礼儀正しく、学習や部活動・学校行事に一生懸命取り組んでいる。保護者や地域の方は、本校の教育に理解を示し、様々な活動に熱心で協力的であり、学校に寄せる期待も大きい。そんな期待や願いに応えるべく、本校の教育目標である「知・徳・体の調和のとれた人間性豊かで、人権を尊重しかつ自主・自律・創造性・郷土愛に富むたくましい人間の育成」をめざし、生徒とともに日々のささやかな実践を重ねている。

中でも、人権学習では、1年生で「共に生きる社会の実現」に向けて、障がい者や高齢者理解を、2・3年生で「すべての人が幸せになること」をめざして、同和問題を中心に学習に取り組んでいる。

特に2年生では、毎年、識字学級との交流を実施しており、ここでの出会いと学びが、生徒や教職員にとって、人権意識を高める上で大切な一歩となっている。



北方から三野中学校を望む



校舎

生活や行事ようす



朝の自主学習



図書委員による絵本の読み聞かせ



体育の授業で



高齢者疑似体験



ボランティア委員による花植え



体育祭

2 研究のねらい

識字学級のおばあちゃんたちとの出会いは、正に、差別の現実学ぶ機会である。わずか一日数時間であるが、生徒も教師も深く強い印象を受ける。だから、この出会いは、人権学習で知識が先行し行動にまで広がりにくい生徒たちが、自分の問題として捉え、人権について真剣に向き合うことができる機会となる。識字学級での体験活動や人との出会が、生徒たちにとって、自己を見つめ、人権意識を向上させる契機となり、さらには、より豊かな生き方へつながると考え、研究と実践に取り組むことにした。

3 実践の紹介

(1) 識字学級との交流のはじまり

本校と識字学級との交流は、2002年度からはじまり、今年で13年目になる。交流のはじまりは、ある学級担任の思いからであった。その教諭は、2年生で識字を学ぶ計画をしていたときに、「私は、識字学級を訪れたことがない。生徒と学習する前に、実際に識字学級へ行って、識字学級生の方からお話を聞きたい。」と人権教育主事に相談した。そして、その主事が、ちょうど当時、近隣の中学校が徳島市内の識字学級と交流しているということを知りつけ、その仲立ちで訪問を依頼し、職員研修として訪問することになった。

その後、夏休みに学年団の職員で識字学級を訪れた。文字を練習するおばあちゃんたちの姿は、真剣で生き生きとしていた。そして、長い間部落差別と闘ってきた生きざまを、お一人お一人が語ってくださった。識字学級を訪れるのは初めてだという職員もおり、資料だけでは学べない、生きた人権学習の場となった。

そして、「生徒にも実際に学級生との交流を体験させたい。」という強い思いとなり、識字学級との交流が実現した。

以来、10年以上にわたり、2年生が交流学习を継続させてもらっている。また、私たち教職員も行ける時に行ける者が自由に足を運び、共学者として参加させてもらっている。

(2) 識字学級訪問の前に

生徒たちは、資料で、文字を奪われること、それによって命や人との関わり、仕事、様々な権利や自由を奪われ、自信や希望までも奪い取られることにつながることを学んだ。さらに、文字を奪い返す営みは、人間が人間らしく生きる権利を奪い返すことだと気づくようになった。これらの学習をもとに、識字学級へ訪問したときに聞きたいことや教えて欲しいことなどを考える。また、自分たちを快く受け入れてくださり、訪問を楽しみに待ってくださっている識字学級生の方



学習室に飾られている解放歌



学習机



共学者手作りのワークシート

に感謝の気持ちをあらわしたいと、訪問の準備を進めていった。識字学級生の方に喜んでもらおうと出し物を考え練習を重ねる。休み時間など少しの時間も使って、熱心に取り組んだ。



出し物の準備（紙芝居の制作や楽器の練習）をする生徒たち

4年前からは、隣保館館長で、識字学級の開設からともに歩んでこられた弘瀬さんを講師に招いて事前学習会を実施している。識字の学習を進めていく中で、疑問に思ったことや識字学級や学級生のこと、共学者にとって識字学級とは？など教室での資料学習の枠を越えた質問を投げかける。

弘瀬さんは、生徒たちの疑問に丁寧に答えてくれる。ただ、いくつかの質問には、「それは、直接おばあちゃんたちに聞いてください。」と敢えて、仲立ちを避け、生徒と識字学級生との直接のやりとりに任せることもあった。



弘瀬さんを講師に招いての事前学習会のようす

（3）交流のようす

当日、生徒たちは早めの給食をすませ、1時間余りバスに揺られて、緊張の面持ちで識字学級生の待つ、老人ホームへ向かう。

迎えてくださるのは、80歳をこえたおばあちゃんたちの明るく元気な笑顔。普段は、毎週水曜日の夜7時30分から学習開始であるが、この日は、三野中生のために昼間に変更して集まってくれている。

自己紹介の後、生徒5～6人が一人の学級生の共学者になる。生徒たちの緊張をほぐそうと、全員にひと針ひと針手編みした毛糸のあやとりの糸を用意してくれている。教えてもらいながら、徐々に和やかに打ち解けて会話も続くようになる。

その後、文字の学習にうつる。
プリントのふりがなの横の空欄に、漢字を書き入れていく。

「あ、これは、一回出てきたわ。」

どう書きよったかいなあ。確か、ノートに先生が書いてくれたんよ。」ノートのページをめくり、その答えを探り当てたおばあちゃんは、「やったー！！」と言わんばかりの満足そうな表情で、丁寧に丁寧に書き込んでいく。

「年とったらな、すぐに忘れるんよ。」

「あ、これはそうか、こう書くんよな。」

目も見えにくく、耳も聞こえにくいはずの、おばあちゃんたちの学ぶ意欲に圧倒され、引き込まれていく。「そう。そう。すごい！！難しいのによく書けたなあ。」「形もきれいし。書き順も正しいよ。」側で見ている生徒たちは、まるで自分が書いているような錯覚を覚え、思わず力が入る。



生徒の感想



学習のようす

- ・ 文字をととても大切にしているなあと思いました。
- ・ もらったプリントに文字を書いて、何回も書き直してバランスを見たりしていました。
- ・ 「わざわざ、教えに来てくれとんのおかしな字や書きよったら申し訳ないわ。」と言って、ぼくから見たら相当うまい字なのに消して、書き直していました。そして何回も、「若いうちに勉強しときなよ。」と言われました。





バルーンアート



クイズ



紙芝居（おむすびころりん）



楽器演奏



ペープサート



ダンス

学習が終わると、いよいよ、準備してきた出し物を披露する時間になる。バルーンアート、クイズ、紙芝居、楽器の演奏、ペープサート、ダンスなど、できればはそれぞれであるが、おばあちゃんたちは、生徒たちの一生懸命と誠意を真心で受けとめてくださるので、会場は笑顔と笑いの連続、だれもが時間の過ぎるのも忘れ、和やかさに包まれる。

生徒の感想

頑張って練習してきたことを精一杯発表しようと臨んだ歌と紙芝居は大成功でした。おばあちゃんたちの中には、涙を流してくれた人もいました。「ありがとう」と言ってくれた言葉と拍手は今でも私の耳に残っています。

最後に、おばあちゃんたちに、これまで学習してきたさらに知りたいことや疑問に思ったことなどを質問する。

「識字学級へ来るようになったきっかけを教えてください。」

「文字がわからなくて苦労したことは何ですか。」

「識字学級に入って変わったことは何ですか。」

「字が書けるようになって変わったことは何ですか。」などである。

生徒の質問の直接の答えに加えて、幼い頃のできごとや差別に対する怒りなどが静かに語られる。



識字学級生の話に耳を傾ける生徒たち

生徒の感想

私たちが質問したことに、おばあちゃんたちは、思い出すのいやな体験を、拳を震わせながら話してくれました。聞くに耐えられないことば、心がちぎれるほど悲しく悔しかったこと、私も聞いていてお腹の底から怒りがこみ上げてきました。

(4) 交流を終えて、その後

交流を終えた生徒たちは、学校へ帰って、振り返りの感想をまとめる。

生徒の感想

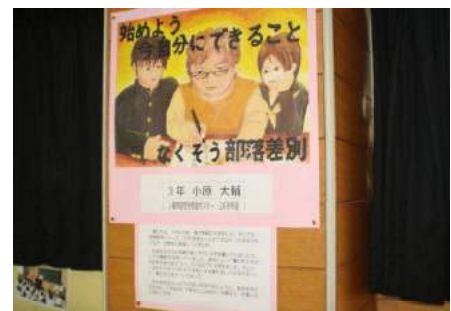
- ・ ふつうに学校へ来て、ふつうに生活して、ふつうに文字が書けることがどんなに幸せなことであるかに気付きました。
- ・ ふつうの生活をもっと大切にしたいと思いました。
- ・ 甘えいっぱい今の自分ではいかん。『よっし、自分もがんばらな。』と思うようになりました。

その後、この日の交流会で得たものは様々な形として広がっていく。

① 「始めよう自分にできること なくそう部落差別」

ある生徒は、人権問題啓発のポスターの制作に取り組んだ。「身近なことで自分にできることを発信しよう。」という教師からの助言を受けて、心に強く印象に残った識字学級でのことを絵画に表現した。

識字学級のおばあちゃんたちと交流をした後、「差別に立ち向かい、差別を許さない生き方をしよう。自分たちでなくしていくんだ。」と決意したこの生徒は、その思いをこの一枚に込めた。暑い夏以上に熱い思いをもって一夏かけて完成したこの作品は、生徒の信念が凝縮された三野中生だったからこそ描けた絵で、その意志は、多くの方々の共感を呼び、昨年の徳島



県人権カレンダーなどに掲載された。現在は、たたみ1畳ほどの大きさに拡大して、校舎内に掲示している。

② 人権作文に

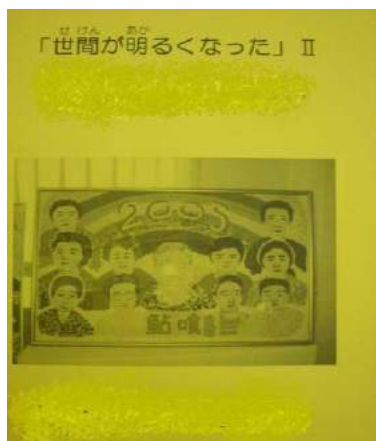
2年生の秋の交流から時を経て、翌年の6月、生徒たちは、これまでの学習や自分の人権についての考えを作文にまとめる機会をもつ。3年生の中には、「識字学級」での交流で学んだことを綴る生徒が毎年数名いる。そのなかに、法務大臣政務官賞を受賞し、全国の多くの方に読んでいただいたAさんの「ありがとう、おばあちゃん」という作文がある。

～「ありがとう」。おばあちゃんから、拍手と「ありがとう」という言葉が返ってきました。

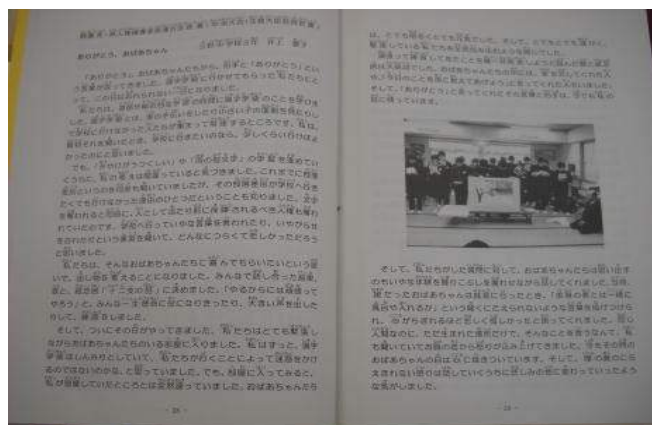
識字学級に行かせてもらった私たちにとって、この日は忘れられない一日になりました。～

というくだりで始まるこの作文は、前出の弘瀬さんをして、「賞を受けたから紹介するのではない。ここの識字学級のことを生き生きと伝え、外部からの客観的評価ともいえる文章で、身内の文章よりよっぽど説得力がある。」と言わしめ、是非にと依頼を受けて、今年発行された「識字学級40周年記念誌」に掲載された。

識字学級との交流で、生徒たちが、何に出合い、何を感じ、どう自分を見つめたかが、そして、そこから始まったことが何なのかが端的に現れた文章なので、少し紹介したい。



40周年記念誌の表紙



生徒作文が掲載されたページ

生徒作文

～ ついに、その日がやってきました。
私はずっと、識字学級はしみりしているところかと思っていました。
でも、部屋に入ってみると、想像とは全然違っていました。
明るく元気で温かく、緊張している私たちを全部包み込むような感じでした。

中略

つらい目にあったから、下を向いているおばあちゃんかというそうではあり
ませんでした。二度と差別をおこしてほしくないという強い気持ちを持った

おばあちゃんたちでした。

中略

たくさんのつらい経験を乗り越え、今たくましく明るく優しいおばあちゃんに
出会うまで、識字学級のことを暗いところと思っていた自分が恥ずかしかったです。
それは、私自身が持っていた差別意識でした。

中略

遠い世界のことと思っていた差別は、実は私の心の中にあるものでした。あの日、
あの瞬間のおばあちゃんの力強い拳、しわの刻み込まれた温かい笑顔が私に
人としての生き方を教えてくれました。

中略

おばあちゃんたちの味わった苦しみや悲しみを決して忘れないように、
強く優しい気持ちを大切に生きていきたいです。

③ 人権劇「道 ～歩き続ける～」へつないで

昨年4月、いつものように、職員の参加と生徒の交流のお願いをしたところ、弘瀬さんから、「先生、ずっと続けたいけど、おばあちゃんたちも高齢で、ひょっとしたら、交流は今年で最後かもしれない。」と厳しい実情を打ち明けられた。

そのことを人権委員会で話をしたところ、3年生の生徒たちと教師の思いが一致して、「識字学級のことを知っている私たち3年生がいるうちに、識字のことを人権劇にしよう。」ということになった。筋書きは教師が主導したが、セリフはできる限り、生徒の感想から生徒のことばをそのまま使った。

人 権 劇 の パ ン フ レ ッ ト



表 紙



配役&スタッフ



上演によせて

人権委員長は、3年続けて人権委員会に入り、人権劇を通して自分も成長し、まわりの啓発にも一生懸命取り組んできた生徒である。識字のおばあちゃんの強さと優しさと信念を識字を知らない人たちに何としても伝えたいと「たんぽぽ」の花にたとえることにした。そして、この「た

んぼぼ」を心を込めて一筆一筆描いていった。

また、勉強などのいやなことから楽な方へ逃げてばかりであった生徒が、心の内を正直に書いてきた作文をヒントに、終盤の劇を飾った。その一場面を写真と台詞で紹介したい。



たんぼぼと重ね合わせて、孫に自分の気持ちを語るおばあちゃん

「ばあちゃん、昔からたんぼぼの花って好きなんや。踏まれても踏まれても、いつの間にかきれいな花を咲かせて立ち上がっている強い花やもん…。それでいて、見てたら、優しい気持ちになれるんや。」



劇前半の学校生活場面

数人の自分勝手な言動が、周りの生徒たちを不快な思いにさせていく。



識字学級やそこで学ぶおばあちゃんに出会った生徒たちが、どのように変わっていったかを次のように表現した。

「おれはな。ここで、おばあちゃんたちに出会って、いろんなことを教わった。俺の一番嫌いな勉強を、こんなに嬉しそうにする人がおるなんて、信じれなかった。俺の中では、学校へ行かされて。勉強させられて。何もかもやらされとるって感じだったんや。」

「俺ら、すぐに『もう、出来ん。無理』とか口に出すやろ。ばあちゃんたちは、どんなに、辛いことや悔しいことがあっても、他人のせいにやせえへん。自分で道を切り開いていきよる。強くて優しいんよ。一緒におるだけで『よっし！頑張ろ。』って思えるようになったんや。」



そして、弘瀬さんから教えられたことを、弘瀬さんの強い信念と重ねて、共学者の立場で語った。



「おばあちゃんたちはな。差別で文字を奪われた。でも、人間としての輝きだけは誰にも奪うことはできん。人の心は変わる。絶対変えられる！！わたしは、そう信じて、喜んでここへこさせてもらっています。」

最後に、自分たちのこれからは、

「先生のその気持ち、私たち若いもんがつないでいかんかん思うんよ。私は、ばあちゃんの孫として生まれてきてよかった。誇りに思う。これからも、差別にや負けん、自分に正直な生き方をしていきたいと思っています。」

としめくくった。



4 成果と課題

おばあちゃんたちの歩んできた厳しく辛かった歳月は、温かく優しくそして強い生き方でもあった。この出会いで、自分の中にあった差別意識に気づき、今の生活を見つめ直すことにつながった。プラスの出会いをした生徒たちは、見て聞いて感じたことを感性で受けとめ、自分もまわりも大切にしていこうとする意識が少しずつもてるようになってきた。そして、文章、ポスター、人権劇などを通して発信することもできた。そうせずにはいられなかったと言ってもよい。また、

このことは、今、自分にできることをしていこうという生徒たちの決意でもある。行動へとつないで行くことを期待したい。

頼もしく思う一方で、新たな課題も見えてきた。1つめは、意欲や決意が時間とともに風化し、必ずしも日常生活に十分いかされているとは言えないことである。普段の生活の中で、特に仲間づくりにどのように反映させていくか。2つめは、識字学級での学びをより深め広げるために、教科や特別活動との関連、振り返り活動などを工夫して、教師がどのような指導を継続させていくか。3つめは、いつかこの交流ができなくなった時に、先輩から受け継がれてきた人権学習の伝統を教材化し、いかに後輩につないでいくかである。今後、毎日の実践の中で対応を検討し、工夫しながら全職員で取り組んでいきたい。

5 おわりに

実は、今年も10月に識字学級へ訪問できることになった。しかし、学級生お二人が高齢なので、負担をかけないように、今までとは少し異なり、質問と対話での交流会をもつ予定だ。

現在、スタートした当時の教師は一人もいない。徳島市内への距離、受け入れてくださる側の事情などいくつかの難題をクリアしながら10年以上にもわたって継続できてきたのは、かつて三野中に勤務されて、この交流を大切につないでくださった先生方をはじめ理解して支援してくださった多くの方のおかげだと思う。

変化の著しい昨今、時代とともに新しいことを取り入れることが重要視されがちであるが、古き良きものを引き継ぐことの大切さを識字学級との交流を通して感じている。

かつてお世話になった校長先生が「新しいものは確かに良いが、古いものには古いなりの価値がある。古いものは、それだけの年月をかけて今に至っている。」毎朝校内を整えながら歩かれていたお姿とこのことばが重なる。

今年のように、形を変えながらも、「識字学級との交流」が実施できることに感謝しながら、今後も、三野中の財産として、私たちにできる形で受け継いでいきたいと考えている。



学 校 祭 で の 全 校 合 唱

「読む 知る 感じる」読書環境をめざして ～学校図書館教育の実践と課題～

三好教育研究所 教諭 加藤公夫

I はじめに

本年度研究主題を設定するに当たり、籍置校において過去 3 年間取り組んできた学校図書館教育について引き続き研究し、実践等についてまとめたいと考え取り組んだ。

辻小学校（籍置校）は、全校児童 60 名～70 名の小規模校であるが、古くから「あけぼの図書館」を設立し、創立五十周年・百周年事業の中にも学校図書館の充実を掲げるなど設備の充実を図り、読書活動に力を注いできた。

平成 25 年には、「四国学校図書館研究大会」の会場校となって研究発表をした。また、オンラインスクールテーマとして「とろろ心の栄養 読書大好き 辻っ子」を掲げ、本に手をのばす子を育てようを合い言葉に読書活動の推進に取り組んできた。「ママ司書」といって、保護者が司書となって放課後行う活動や毎週水曜日の地域ボランティアによる朝の読み聞かせ活動など PTA や地域の方々のご協力もいただいている。

児童の読書に対する関心や意欲を育て、学び方を身につけることができる読書環境になることを願い、24 年度から研究に取り組んできた。

本研究では、辻小学校での四国地区学校図書館研究大会での取り組みや、その後の 3 年目の実践、第 27 回四国地区学校図書館研究大会に参加したことを通して、学校図書館の在り方や課題について考えていきたい。

II 辻小学校での取り組み（第 26 回四国地区学校図書館研究大会）

1 研究の概要

辻小では、よき伝統として「ママ司書活動」という全保護者による図書の貸し出し・読み聞かせ活動や、地域のボランティアの方の朝の読み聞かせ活動が続けられてきた。その中でもママ司書活動は実に 40 年以上の歴史を持ち、本校の図書館活動を支える大きな力となっている。「今日は誰のお家の人かな」と、週 3 日間ではあるが、放課後のママ司書さんの来校を心待ちにしている声がよく聞かれる。その積み重ねもあり、普段の生活の中で自然と本に親しむ機会を得、本を読む楽しさを実感する児童が多い。だが、その一方、読書にあまり興味を示さず学校図書館（以下「図書館」）の利用が少ない児童がいたり、読みやすい本ばかりを手にとるといった読書への偏りがあったりすることも事実である。

学校図書館の利活用について、学習指導要領総則には、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」と明示されている。さらに、「学校図書館については、教育課程の展開を支える資料センターの機能を発揮しつつ、①児童自らが学ぶ学習・情報センターとしての機能と②豊かな感性や情操をはぐくむ読書センターとしての機

能を発揮することが求められる」とある。

そこで、この機能を発揮し図書館の活用を推進するために、まず児童が、学習活動の様々な場面において「本を読む」という場を設定することとした。授業やその他の活動において、意図的に、広く本に触れる活動を取り入れることで、本との新しい出会いをつくり、「知る」「感じる」という経験につなげていく。「知る」とは、読書によって様々な知識を得ることである。自らが調べることによって疑問や課題を解決する場面もあれば、本を読み進める中で新たな発見に気づく場面もあるであろう。そして、「感じる」とは、読書によって豊かな感性を呼び起こされることである。本の中で繰り広げられる世界に入り込み、喜びや悲しみを感じる場面もあれば、本全体から作者の深い思いを感じる場面もあるであろう。こうした経験の積み重ねによって、本に親しむということが、「知る」喜びや、「感じる」喜びを見いだすことにつながっていくのだということを児童自身に気付かせたい。

また、こうした活動を支えるものとして、図書館が児童にとってよりよき読書環境となるよう整備しなければならない。図書館が心安らぐ空間となること、学びたいという知的好奇心を向上させるものになることは、本に意図的に出会わせる活動と同様、児童にとってよりよき読書環境となるに違いない。

そして、よりよき読書環境とする手立ての一つとして、ICTも活用する。これまでのICT活用の取り組みを生かしつつ、図書館活用を推進できるものとして取り入れたい。

これらのことから、以下の2つの仮説を立てて研究を進めた。

研究仮説

①疑問や課題に関する本を読み、新たなことを知る経験を積み重ねることによって、課題解決につながる読書をする児童が増えるだろう。②幅広く本を読み、感性に響く経験を積み重ねることによって、読書の楽しさを知り、自主的に読書をする児童が増えるだろう。

2 研究の実際

1 図書館の環境整備

(1) 児童の「読みたい、知りたい」に応えられる図書館に

「何か本を読みたいけど、読んでみたい本がない」ある読書好きの児童から聞いた言葉である。一般的に学校の図書館は蔵書数が少ないうえに古いものが多く、児童が読んでみたい、手に取ってみたいと思えるような魅力のある本が少ない状況がよく見られる。1年間の図書予算では、児童の期待に添える図書館にするのは難しい。そこでその解決策として前年に休校になった市内の2つの小学校から約1200冊の図書をもらい受け、本校図書館に移管した。

また、これまでは調べ学習に図書を活用したいと思っても、調べたい内容にあった本が少なかった。移管時の本選びのポイントとして、調べ学習に使える図書を増やすということを意識して選んだ。

新しい本が図書館に入ると、児童はすぐに気づき読もうとする。「この本、読んでみたら意外に面白かった」という経験は、「またこんな本を読みたい」「もっといろいろな本を読んでみたい」という、児童の新たな読書意欲につながるのではないかと考える。本を通して、それまでとは違ったことに興味がわくこともあるだろう。



(2) 利用しやすい図書館に

○配架の改善

配架の仕方を次のように工夫してみた。

- ・日本十進分類法にしたがい、0類から右回りに並べる。
- ・9分類の本は著者の五十音順に並べる。
- ・絵本は「絵本コーナー」に並べる。
- ・9分類では著者名、他の分類の図書は「地理」「福祉」「スポーツ」などといったジャンルの表示をする。
- ・シリーズになっている本はなるべくばらして置かず、まとめて並べる。



配架の作業は職員だけでなく、児童にも関わらせる。自分たちの力で図書館が変わっていくことを楽しみ、愛着が増す。本を並べ自ら作業したことで、例えば並行読書を行うとき、調べ学習の資料となる本を探すときなど、目当ての本を見つけやすくなり、主体的に本選びができるようになる。



○新聞コーナーの設置

新聞コーナーを特設し、日々変えていくことで児童の関心を引くことができる。新聞を読む高学年の姿を見て、低学年の子も興味を持って新聞に目を通すようになる。複数社の子ども新聞を掲示すると、児童はなお多くの情報を得ることができるほか、新聞によって取り上げる内容や記事の書き方が違うことにも気づくことができる。

○資料コーナーの設置

図書館の奥に、総合的な学習の時間や社会科などの調べ学習に利用できるパンフレットや地図などの資料、児童の学習の記録などを置き自由に見られる資料コーナーを設定する。またデジタル図鑑とそれを再生するプレーヤーも置き、児童が知りたいと思ったことをなるべく早く、詳しく調べられるようにしたことで活用できるコーナーとなった。



○貸し出し・返却時間の変更

児童の生活を見直し図書の貸し出しや返却の手続きができる時間を増やしたり、変更したりする。

例えば1日2回の貸し出しの機会を確保するため、休み時間の回数を増やす。しかし、業間休みは外で遊びたい児童が多く図書館に足を運ぶことが少ないので朝の活動前に手続きを行えるよう変更した。登校した児童が、図書館にたくさんの友達がいるのを見て「本を借りにいこう」という気持ちになり、朝の図書館の利用が増えた。

○代本板の工夫

クリアホルダーを利用した代本板を作り、台紙の色を学年ごとに変えた。この代本板を使うことによって児童の好みのジャンルの本や傾向をつかむことができ、図書の購入や整理をする際の参考になる。読書用と学習用を使い分けることもできる。



(3) 親しみやすい図書館に

学校の図書館は、全児童が児童玄関や体育館などから教室へよく行き来する理想的な場所にある。そのため自然と一日に何度もその前を通ることになった。戸は大きく開かれ、開放的な造りになっているため、図書の貸し出しをしている友達を見かけたら「わたしも、本を借りに行こう」とか「休み時間には、図書館で本を読もう」などといった気持ちになり、自然と人が集まる身近で親しみやすい場所になる。人が絶えないということは、児童の気持ちを図書館に向かわせるうえで、効果的であると考えられる。

図書館はさらに次のような面で児童が親しめる場所になっている。

○設備

・ 畳コーナー

絵本コーナーに児童がほっとくつろげる場所として畳スペースがあると、縦割り班やママ司書さんの読み聞かせや一冊の絵本を広げ、何人かで楽しそうに話したり読んだりするスペースとなる。リラックスした様子で本を読んでいる児童などの姿が、多く見られる。



畳コーナー



ベンチと丸テーブル

・ 読書用テーブル

いくつかの場所に違ったタイプのテーブルを置き、使う時間や目的に応じた利用のされ方がされている。図書館内のテーブルは、低学年も高学年も、調べ学習や授業に使いやすいように高さを2種類にし、畳スペースや空きスペースには丸テーブルを配置する。

・ ベンチ

ちょっとした時間に本を読んだり選んだ本を少しだけ読んだりする時に、気軽に座って読書を楽しめる場所として、壁際に設置。図鑑などを見て知りたいことを調べる時も、少し腰をかけられる場所というのは便利である。中には「ベンチの隅っこに座るとなんだか落ち着いて本が読める」という児童もいる。ベンチは静かで、人の目をあまり意識しないですむところらしい。畳やベンチなど、児童のそのときの気持ちや本の利用目的に応じて読む場所が選べるという環境は、貴重であると考えられる。

・ 様々な展示スペース

図書館の中や入り口などの展示棚の工夫もたいせつである。おすすめの本や新刊書などや季節に

ふさわしい本展示することで児童の読みたいという気持ちを高める効果がある。



○掲示物等による雰囲気作り

図書館の入り口では、図書館のマスコットキャラクターの「かんちゃん」と「ともちゃん」を掲示、児童たちを図書館へと迎え入れる。児童が考えたキャラクターを掲示することで、図書館がより親しみやすい場所になると考えた。

図書館の中の壁面は、運動会、ハローウィン、クリスマス、秋の風景など行事や季節に合わせた掲示物で飾られている。いつでもだれでも気軽に立ち寄れる図書館になるように、明るく楽しい雰囲気のできる掲示物を定期的に更新することが大切である。「読書の木」には、昨年度は、読書冊数が学年の目標に達した児童の数を、今年度はそれに加えて必読書を読破した児童の数も、読書の数の数として表されている。

低い書架の上の壁面も効果的なお知らせコーナーである。児童のおすすめの本の展示コーナーとして利用し、「ぜひ読んでみてください」と書かれたたくさんのカードで読書を勧めている。



2 本に親しむ活動

(1) 読み聞かせ活動

○仲良し班での読み聞かせ

毎週 1 回の朝の活動の時間を使って、縦割りの仲よし班での読み聞かせ活動をした。一つのグループの人数は、11名～13名で教室や図書館で読み聞かせ活動をした。進行は、班長の6年生が行い、読み聞かせの担当は、班の5・6年生が毎週順番で絵本などを読んでいる。

5・6年生になると低学年、中学年までの読み聞かせの体験や今まで国語の授業など学習したことをもとに自分なりに工夫して取り組んでいる。週に一度の読み聞かせではあるが、5・6年生は、よく準備してグループのメンバーにわかりやすく伝えようとがんばり、下の学年には読書の楽しみとな

る。



教室で



6年生から1年生へ

○6年生から1年生への読み聞かせ

4月の中旬から、6年生の1年生への読み聞かせ活動を始めた。最高学年として、下級生の世話をする活動の1つとして取り組んでいる。1年生の反応や感想や様子を見ながら本を選んだり、楽しんでもらえるように読み方や声の出し方を工夫したりして積極的な活動ができる。

（２）図書委員会の活動

〈読書集会の運営〉

全校のみんなに本の楽しさを感じてもらえるよう、読書集会の企画運営を図書委員が行う。意見を出し合う中で、図書委員一人一人の読書啓発への意欲も高まっている。これまでの読書集会では、絵本の読み聞かせや読書クイズ、本の紹介、ペア読書などが行われてきた。

○絵本の読み聞かせ

全校児童がよく見えるように大型スクリーンを使用して、絵本の読み聞かせを行う。集会前には、図書委員が登場人物やナレーター等、それぞれの役を決めて、本を読む練習を繰り返した。その結果、主人公や作者の思いを感じ取り、気持ちを込めて感性豊かに読める児童が増えてきた。



○人形劇による本の紹介

ふだん行っている本の紹介と少し違った紹介として、人形劇にして本の紹介を行った。低学年、中学年、高学年に向けて自分たちの感想を織り交ぜ、自分たちの選んだ本をしっかりと読んでもらおうと本の紹介を劇風に行った。動物のぬいぐるみや人形が紹介するとあって、低学年の児童をはじめ、どの学年も興味津々で見入っていた。その効果は大きく、集会後すぐに、紹介された本をさがしに図書館に行く様子が見られた。



○読書クイズ

仲よし班（縦割り班）に分かれて、様々な読書に関するクイズを行う。どの学年も活躍できるようにと、クイズには低学年、中学年、高学年それぞれに人気の本からの出題を考えて取り入れている。

○ペア読書

なかよし班の中でペアを作り、1対1で読み聞かせを行った。読み手になった児童は、前もって読む相手に「どんな本が読みたい？」「どんなお話が好き？」等いろいろと尋ね、じっくり本を選んで、当日までに一生懸命練習する。1年生と6年生、2年生と5年生等いろいろな学年のペアが、本

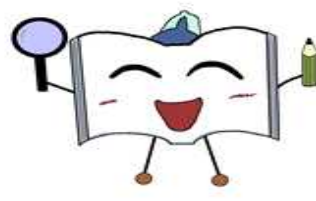
を挟んで楽しそうに読む様子があちらこちらで見られた。

〈図書館のキャラクターづくり〉

図書委員会による図書館のキャラクター募集をした。「不思議だな、知りたいなと思ったら調べよう」と呼びかける「とも（知）ちゃん」には鉛筆、虫眼鏡を持ったキャラクターを、たくさん本を読んで「豊かな心で感じよう」と図書館へ誘う「かん（感）ちゃん」には、やさしくていろいろなことに感動する心をもったキャラクターを図書委員が選んだ。「ともちゃん」も「かんちゃん」もそれぞれのイメージに合ったかわいいもので、児童に人気があり、学校のいろいろな場所で、児童の心を図書館へ向かわせる効果となった。



かんちゃん



ともちゃん

〈本の紹介〉

折に触れ、おすすめの本や新しく入った本の紹介を全校朝会で行うほか、本の紹介カードを図書館に掲示する。図書委員によるブックトークでは「動物」「冒険」をテーマに本を選び、本への思いを語った。新しい本の紹介やブックトークをするために、図書委員は図書館の本を自分の好みに偏らず幅広く読み、物語の世界に浸ったり、新しいことを知ったりしたことを紹介するようになる。ブックトークや紹介した本を図書館の「図書委員おすすめの本コーナー」に展示する。



〈読書クイズ〉

読書集会のとき以外にも読書クイズを出している。問題の多くは学年ごとの人気ランキングに入っている本から選び、低学年、中学年、高学年にそれぞれ3問ずつ模造紙に書いて廊下に掲示した。全校の児童の反応は上々で、ほとんどの子が応募し、全問正解者へ図書委員手作りのしおりが贈られる。

（３）おすすめの本の紹介

○教職員による紹介

子どもたちが新たな本と出会える機会を提供する場の一つとして、毎月1回、教職員が順番に、児童に読んでもらいたい本をおすすめの本として紹介している。全校児童が集まる朝会や給食の時間を利用して紹介され、その後誰でもすぐに手に取れるように、図書館の中に目立つように展示している。

○児童による紹介

図書委員会による紹介のほか、学年で本の紹介カードを書き教室で読み合ったり、図書館に掲示したりしている。子どもに読書習慣がつくにつれて、おすすめの本の発表や紹介カードに対する関心が高まってきている。



（４）ママ司書活動

辻小学校では、４０年以上前から「ママ司書」と呼ばれる保護者の活動が続けられている。月・火・金曜日の週３回（３時から４時半まで）、各家庭のお父さんやお母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが来校し、図書の貸し出しや読み聞かせをしたり、本の修理・整頓をしたりと積極的に活動を行ってくださっている。

そんなママ司書さんを子どもたちはいつも心待ちにしており、読書活動の大きな意欲づけとなっている。

○活動の様子



（５）ICTの活用（デジタル図鑑、インターネットの活用）

○４年理科「春の自然」「夏の自然」「秋の自然」「冬の自然」での実践

４年生では、「春の自然」の学習では、学校周辺に観察に出たとき「写真を撮って帰り」教室でデジタル図鑑による調べ活動を行っている。

本と同じように索引があり１ページごとめくれるデジタル図鑑や、子ども用のデジタル百科事典により、「１人に図鑑１冊」が可能となる。数人で図鑑を囲むと、主張の強い子の意思でページがめくられていくため、主導権を持てない子は、課題を終えるのも遅くなり、なかなか調べ方も身につかない。１人１冊だと、それぞれが自分の意思でページがめくれ、順番待ちなしに自分の調べたいものが調べられる。

索引から調べたり、ページをめくりながら見つけたりしながら、名前、大きさ、特徴などを「知る」という経験をした後に「このデジタル図鑑と同じ本が図書室にある」ことを知らせると実際に図かんを手に取り調べることになる。それを「夏の自然」「秋の自然」の学習でも繰り返すと、休み時間に虫を捕まえたり、教室にチョウやトンボが入ってくると、学校図書館の図鑑やデジタル図鑑で、名前や特徴を調べることが自然にできるようになってくる。名前がわからないとき、検索システムと違って、ページをめくりながら調べるという方法があるのもデジタル図鑑ならではの点である。１人１台のタブレット・ＰＣがあり、それを文具のように自然に使える環境だからこそできる活用ではあるが、電子書籍もふくめて、これからの図書利用の選択肢となりうるだけの利点がある。

○総合的な学習の時間「めだかのことを調べよう」でのICTを活用した実践

5年生では、本校研究主題の「知る」ことに重点を置き、特に授業の中での取り組みによって読書環境の充実を図ることを目指した。授業の中で本やインターネットを活用することで、新しいことを知る喜びを得たり、課題を解決したりしていきたいと考えて実践を重ねた。そこで、本だけでなく、児童それぞれがタブレットPCを使って調べ学習を進められるよう指導した。

4月当初、教室の水槽でめだかを育てた機会に、めだかの種類やえさ、すみか、病気への対処方法など、めだかが住みやすい環境をつくるために分担して必要なことを詳しく調べた。生き物係を中心に毎日みんなで様子を観察しながら、めだかを育てる過程で知っておかなければならないことを予想しながら本やインターネットを使って知りたいこと、必要なことを調させた。児童の積極的な取り組みが見えた。



(6) 授業実践 (2014年10月)

第5学年 総合的な学習の時間 学習指導案

1 題材名 お年寄りが暮らしやすい井川町にしよう

2 単元目標

介護や福祉について具体的に調べ、自分たちができるお手伝いの方法を知り、福祉に対する意識を高め、家庭や地域の一員としてできる事を考える。

3 単元の評価規準

A人や自然 社会との関わり	B学習方法	C自分自身
①活動の意欲 自分の興味関心や体験などから調べたい課題を見つけようとする。	②課題設定をする力 高齢者問題について知っておかなければならないことを考えそれをもとに課題を見つけることができる。追求の視点を明確にしながら課題を設定することができる。 ③課題を追求する力 収集した情報を整理・分析したり、友達の見解などに関連付けたりして、町の高齢者問題について自分なりの意見をもちながら追求活動をすることができる。必要な情報を収集したり選択し、効果的に活用したり整理しながら学習を進めることができる。 ④表現する力 町の高齢者問題について、調べたり話し合ったりする中で、自分の学習を振り返り、自分の課題にあった	⑤生かす力 町の高齢者問題を考える中で、自分にできることを考え、これからの生活に生かそうとしよりよく生きようとすることができる。

	表現方法を選び、工夫して表現することができる。	
--	-------------------------	--

(1) 子どもについて

本学級の児童は、明るく活発で男女関係なく協力し、生活をよりよくしていこうと意欲的に活動することができている。また、友だちの考えを聴きあい、認め合う雰囲気大切にしようという心がけ、学級が安心して過ごせる空間となりつつある。しかし、自分で考えて進んで行動することはむずかしく、誰かの指示をまっていることが多い。学習では、自分の考えや思いを書くことはできても、進んで意見を発表できる子どもは限られており、自分の思いを表現したり、友だちの意見を理解し、共感的に受けとめようとしたりする力はまだ十分とは言えない。また、集団の中でうまく人間関係が築けるか不安に思う児童も少なくない。

また、介護や福祉についての知識やお年寄りについての意識もあまり高くない。これは、お年寄りと離れて住んでいる児童が多いことやいっしょに住んでいてもおじいちゃんやおばあちゃんが（５５歳～６５歳くらいで）元気で暮らしているからである。児童の多くは、お年寄りに大切にされており、親切にされることがあたりまえだと思っている。そこで、お年寄りに起こる体の変化を疑似体験することで、その痛みや苦労について理解することから介護や福祉について考えを深めていく。

本単元では、お年寄りの身体の変化やお年寄りがかかえている問題点など、これからの高齢化社会に目を向け、自分たちにできることを考えていく。近い将来必ずくる家族や社会の高齢化について自分たちがどうかかわっていけるのか、自分たちができることを実践化できるようにつないでいきたい。

(2) 教材及び単元の構成について

本単元は、お年寄りとの交流を通して、自分たちの住む地域をお年寄りの視点に立って見つめ直し、いろんな体験をすることで理解を深めていく。そしてこの町をお年寄りが暮らしやすい町にするために何が必要か、自分たちにできることを考える。また、４０年後の家族やこの町をどのような町にすればよいかを考え、その時に自分たちができることや、理想的な町を作るためにどうすればよいかを想像する。

そこでまず、介護や福祉について、図書館の本やインターネットで調べてみた。ユニバーサルデザインや老人の体の変化など、一人一人が疑問に思うことを詳しく知ることができた。そして、そこで得た知識は、ゲストティーチャーのお話を聞く活動においても生かされ、お年寄りになるとどのような変化があるか、どんな苦労があるのかをゲストティーチャーの保健師さんの話を聞いた時にも、目を輝かせて発表したり意欲的に内容をしっかりと聞き取る児童の姿へとつながっていった。このように調べたことが実際の活動で生かされる経験を積み重ねることにより、本から知識を得るよさに気づかせたい。そして、自ら本を活用し、進んで調べようとする意欲を高めていきたい。

学校全体で取り組んできた老人施設への訪問についても、１１月にはボランティア体験として３カ所の訪問を計画した。この体験をすることで、お年寄りの人たちの思いや願いに気づかせたい。また、そこで働く人々の思いにも触れられると考えた。

これらの学習や体験を通して、ボランティア活動や福祉に関心を持ち、自ら考え、実践していこ

うとする気持ちを持つことは、これから生きていく上でとても大切なことだと考える。

また、これからの生活を改善していこうとする意識の向上をねらいとした。福祉体験やボランティア体験の発表をすることで、自分や友達の考え方を知り、伝え合う表現力を養ったり、多様な考え方に気づき、お互いを認め合えるような人間関係を築いたりすることができれば、それは学校生活での大きなエネルギーとして機能するはずであると考えた。

本単元では、図書館の本やインターネットでの情報で調べたことを先行知識として活用している。それはゲストティーチャーのお話や体験を通して、さらに深め高めることができる。そして、これまでの学習や体験を基に、ふるさとの福祉について自分たちの言葉で語れるように探求していく本活動は、将来の子どもたちが町を築立つ時、町に根付く時に大切な礎となるものと考えている。

5 学習指導計画（27時間）

- 第1次 福祉体験をしよう・・・・・・・・・・・・・3時間
- 第2次 介護や福祉について知ろう・・・・・・・・・・・・・5時間
- 第3次 お年寄りを支える仕事・・・・・・・・・・・・・4時間
- 第4次 ボランティア体験をしよう・・・・・・・・・・・・・7時間
- 第5次 40年後の家族を考えよう・・・・・・・・・・・・・3時間（本時1／3）
- 第6次 自分が今できることを考えよう・・・・・・・・・・・・・5時間

活用した図書	ホームページ
NEWボランティア辞典，ちょボラ世界を広げよう，福祉とボランティア，健康・福祉・ボランティア体験を体験，もっと調べよう福祉ボランティア，ポプラディア5，福祉なるほど解説、上下巻，まちのユニバーサルデザイン，ユニバーサルデザインってなに，お年寄りとおふれあう，おばあちゃん，ちょボラでバリアフリーのまちづくり，福祉の世界地図，仕事図鑑11，ふれあうことからはじめよう1～6，福祉に関わるしごと1～3，老後は誰とくらしたい，など全32冊	介護福祉の学習ノート ヨコハマふくまちNET 日光市社会福祉協議会 こどもくらぶ MY介護の広場

6 本時の学習

（1）目標

40年後の自分や家族について考え，親たちが安心して暮らせるように本などの資料を使って調べ自分の考えたことが発表できるようにする。

（2）展開

過程	学習活動	子どもの意識の流れ	支援・留意点
	1 40年後の自分を考える。 2 活動の内容を知る。	・どこに住んでるかな？ ・家族は何人いるかな？ ・職業はなにをしてる？	○将来の夢を思い出させ，自分の40年後を想像させる。 ○活動内容をは

つかむ	40年後、年をとった親にどんなことができるだろう		つきり伝える。 ○自分の考えをもてるよう、時間を確保する。 C⑤ 高齢者問題で、自分自身で考える
	・本やホームページをみて確認する。 3 班で話し合い簡単に発表する。	・どんなことができるかな ・どんな機器があると便利かな ・一人暮らしなら何が必要かな ・病気ならどんな施設があるといいかな ・近くに老人施設がほしい ・デイサービスを考えたい ・ITを利用できないかな ・携帯電話で簡単に連絡できるシステムを作る ・一人暮らしの親がさみしくならないように何ができる ・家を住みやすく変える ・ボランティアとITと施設についてもっと調べてみたい ・新しい通信機器やシステムを利用する ・携帯電話を利用する ・ヘルパーさんに手伝ってもらおう。	
まとめ	4 学習をふり返り、今後の学習への意欲をもたせる。		

7 実践を終えて

子供たちは、家にお年寄りがいる児童がほとんどである。しかし実際にはお年寄りに優しく大切にされており、あまりお年寄りのことを理解していない児童が多くいる。そこでお年寄りのことや福祉や介護についてもっと理解してもらおうとこの授業を計画した。

最初に保健師さんをゲストティチャーに招き、福祉体験をしてもらった。一輪車の介護や乗り方について体験したり、お話をきいた。その後の調べ学習では、図書館の本やインターネットを使って各自で調べていった。調べてみて分かったことをもっと具体的なものにするために社会福祉協議会からゲストティチャーにきてもらって学習することで理解が進んでいった。ボランティア体験では、デイケアセンター、みのだ園と敬寿荘の3つの施設で交流を深めた。ゲストティチャーに学んだことや調べて分かったことをもとに実際に体験することでお年寄りや施設について理解が深まったと思う。

児童は自ら体験することによって疑問が生じ、調べる目的が明確になり調べようとする意欲が高まる。調べ学習は、児童にいかに関心を抱かせ関心をもたせるかがポイントであると確信した。



Ⅲ 辻小学校での取り組み(研究3年目)

1 子どもたちとの活動

2年続けての6年担任として、下記の年間計画を基本に図書館を利用しながら、学習を進めていった。以前から利用している市立中央図書館の司書やICT支援員（WEB検索の時など相談しながら使いやすい教材の絞り込みや技術的支援）に協力していただきながら進めていった。

2年間の図書館教育での活動で、疑問や課題に関する本を読んだり、新たなことを知る経験を積み重ねたりすることによって、課題解決にむけての必要なスキルや効果的に調べる力が身についてきたのでいろいろなことで学習に役立てることができた。4月の修学旅行の調べ学習では、東大寺や金閣寺などの歴史USJの見学コースについてインターネットや図書で調べ班で話し合っ決めて。5月は、社会科で県埋蔵文化財課の出前授業では、歴史の本が不足していたので古墳や土器などの本を三好市中央図書館より借りて、調べ学習に利用した。

○ポップ作り

児童は4年生の時に、教師がテーマを決めて読む楽しみを味わってもらおう働きかけ、タブレットを授業に取り入れたりしていた。また、5年生では、ICTを活用した授業や調べ学習をしたり、週末に感想文日記を書くことなどによって読書量も増加し、本を楽しんで読む児童も増えてきた。6年生となった今年は、4年生から2年間、読書活動を進め、子どもたちには読書習慣が身についており音を楽しんで読むことができるようになった。

そこで、自分たちの読んだ本の中で学校の友だちに勧めるおもしろい本のポップ作りに挑戦してみた。6年生も2学期になると好きな本について深く読めるようになっていて、その本のおもしろさや感動した場面など人に伝えたいポイントもよく理解している。その伝えたい所を文章や絵を工夫して他の児童におもしろく伝えることができるようなポップ作りをしてみた。一番のお気に入りの本ということで、本の内容もよく理解しており興味をひくような工夫したポップが作れていた。図書館の入り口においたポップにはたくさんの児童が興味を示し、図書館で本を探す様子が見られた。



○税金についての調べ学習

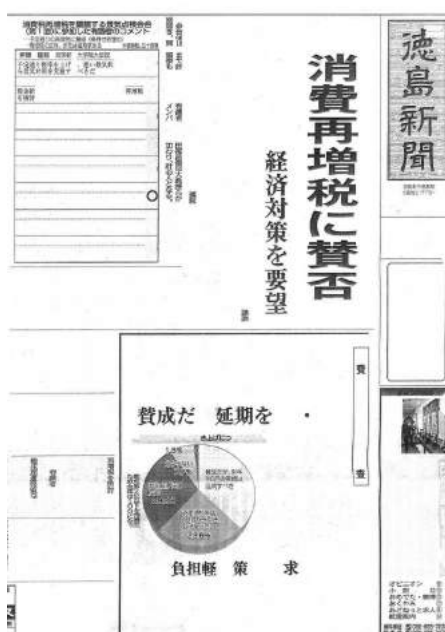
福祉について学習で十分に調べることができなかったもので、今年の総合の学習においては「よりよい生活をするための福祉の費用について」その元となる税金について学習を進めた。まず6月に、租税教室で学習した税金について、本やインターネットで調べ、税金について深く理解するためその間

題点を自分なりに考えていく活動をした。収集したことを整理・分析して自分の考えを整理した⑦⑧で発表したり、税金についていろいろな観点から話し合ったりしていった。

11月には、消費税や税金のことについて新聞に掲載されていたので、新聞を使っの授業に取り組んだ。高齢者問題など様々な問題解決のためにこれから税金をどう生かしていけばいいのかについて学習したことをまとめ発表させた。



(新聞の記事の一部)



[発表会で使ったスライドショー]



『税金と暮らしの4班の発表から』

次に、世界の消費税について発表します。

まずはデンマークです。デンマークは消費税が25%もあり、世界で消費税率が高い国です。でも、国民の生活は安定して住みやすいです。次に消費税が高いのはイタリアで、22%あります。中国には、17%の消費税があります。韓国は、10%あります。しかし日本は、8%で、外国に比べるととても少ないです。その上に、国の借金がこの中でも一番多い国なのです。それに最近では円安ドルになってきているので、輸入の時にお金がよくかかります。

次に、将来の税について発表します。

僕たちの生活のために国がやらなければならない仕事はたくさんあって、そのために必要なお金は税金だけでは足りません。

いま、日本では、少子高齢化が進んでいます。だから、今は、4人で1人のお年寄りを支えています。でも30年後には人口の40%くらいの人が65歳以上になるといわれています。病院に行く人が増えると、医療費もたくさんかかります。だから、将来は、今は3割負担の医療費が、5割、7割と増えていって、最後には、全額負担になるかもしれません。3割負担というのは、1万円が3千円ですむということです。それが、5千円、7千円、1万円になるかもしれないということです。これからの医療や年金などにかかるお金は、どんどん増加していくのでその費用をどう作っていくのかはとても大変なことだと思います。

この問題を解決するには、僕たちが考えるには、消費税を20%まで上げようと考えています。でも、これで解決するとは限りません。だから僕たちが30年後の未来を考えて、子供からお年寄りまでの人が、楽しく生活できるような社会を作れるように日本を変えていかなければいけないと僕らは考えています。

○26年度図書利用年間計画 第6学年 (○学習・情報 ●読書)

	4月	5月	6月	7月	9月	10月
教科 その の本	(国) 風切つばさ ●自分自身や友情 について考えられる 本 (国) 表現を工夫して書こう ●いろいろな詩の本 (社) 縄文のむらから古墳 のくにへ ○古墳や遺跡につ いての本 (児) 1年生を迎える会をし よう ○ゲーム・レ クリエーションの本	(国) イースター島にはなぜ 森林がないのか ●生態系について の本・森林に関する本 新しく追加(社会) 埋蔵文化財出前授業 ○遺跡・土器などに 関する本 ○WEB サイト (社) 天皇中心の国づくり ○平安時代の貴族や 庶民の生活について の本 (音) 交響曲第5番「運命」 ●ベートー ベン伝記	(国) ばらの谷 ●職人の物語 (社) 今に伝わる室町文化 ○室町時代の文化 に関する本 (児) 七夕集をしよう ○七夕の話 ○ゲーム、レクリエ ーションの本 (理) ヒトや動物の体のつく りとはたらき ○体の各部分の仕組 みや働きについて調 べられる本、webサイ ト、図鑑	(国) 本は友達 ●毛利衛さんのお すすめの本 (社) 戦国の世から江戸の 世へ ○全国統一を 進めた三人の武将に ついての本 (理) 広げよう科学の世界 を ○調べたいこ と、疑問に思ったこと について調べられる 本	(国) 詩と短歌を味わおう ●詩の本、短歌の本 (社) 江戸の文化と新しい 学問 ○江戸時代 の文化や学問の発展 に寄与した人々の業 績についての本 (国) 資料を活用して書こう ○自分のテー マに沿った資料となる 本 webサイト	(国) 海のいのち ●立松和平氏の 本、命の物語 (国) 子供句会を開こう ○俳句集、季語な ど俳句についてわ かる本 (社) 明治の国づくりを進 めた人々 ○明治の世の中を つくった人々の業績 や人間関係のわか る本

(総合)		(総合・社会)		(理)	(総合)
心に残る修学旅行に しよう ○修学旅行で 訪問する施設につい て調べる本		税金のお話 ○税金のパンフレッ トや本		月と太陽 ○月 の表面の様子につい て調べる本、図鑑 webサイ	税金の種類や仕組 みを調べよう○税金 について調べる本、 Webサイト
11月	12月	1月	2月	3月	
(国) 未来に生かす自然の エネルギー ○未来 エネルギーについて の本、「持続可能な社 会」についての本	(国) ヒロシマのうた ●戦争と人間の生き 方をえがいた本 (社) 新しい日本、平和な世 界へ ○戦後日本 の諸問題について調 べる本 webサイト (理) 大地のつくりと変化 ○火山活動や地震に よる大地の変化につ いての本 (総合) 新聞感想文 ○今、興味・関心の ある記事について考 えよう	(国) ふるさとの良さをしよ うかいしよう ○井川町誌 ○郷 土の偉人に関する資 料 webサイト (社) わたしたちの生活と政 治 ○日本国憲法につい ての本 (国) 伝えよう大切にしたい 名言 ○名言集 webサイト (総合) 12才の自分 ○職業についての本 (体) 病気の予防 ○生活習慣病の原 因、症状などについて 調べる本	(国) 豊かな日本語の使い 手になろう ○日 本語や言葉について の本 (社) 世界の中の日本 ○世界の様々な国 の生活、産業、文化な どについての本 (理) 自然とともに生きる ○くらしと環境につ いて書かれた本 (家)発表を追加 考えようこれからの生 活 ○資源を生 かす活動について調 べる本 (総) 税金とくらし発表会を 開こう ○税金について調べ る本、Webサイト	(国) 君たちに伝えたいこと ／春に ●生き方について考 えられる詩の本 (社) 世界の中の日本 ○ユニセフHP (理) 自然とともに生きる○ 生物と環境、わたした ちのくらしと環境の関 わりについて調べる 本	

これらの取り組みは、小学校におけるこれまでの読書活動のまとめの活動とした。児童が主体的な読み手となって自身の選んだ本をよく読み込み、その本の要旨をよく理解した上で他者に紹介できていた。また、税に関する調べる学習では、分からないこと、疑問に思うこと、知りたいことなど何を調べるのかテーマを明確にし、的確な調べ方によって課題を解決し、それを他に伝える。これまでの図書館教育の積み重ねの成果であると考えられる。

IV 第27回四国学校図書館研究大会について(参加しての感想)

1 大会主題 豊かな心と自ら学ぶ力を育てる学校図書館

2 期 日 平成27年11月5日・11月6日

3 会 場 1日目 四万十市立文化センター

2日目 小学校部会 四万十市立中村小学校

中学校部会 土佐清水市立清水中学校

高校部会 高知県立中村中学学校・高等学校



4 主題設定の趣旨

学校図書館が「言語活動の充実のための豊かな心を育む読書センター」「学習したことの知識の活用や探求学習を支える学習センター」「情報を適切に収集し、判断し、編集し、表現することという情報活用能力を育む情報センター」としての役割を展開すること、さらに「教育活動全般にかかわる図書や図書館以外の資料の充実と系統的な学び方の指導法の確立を図ること」により「ことばの力を培う」

5 中村小学校会場の様子

〔環境整備・図書の充実〕

オープンスペースの活用



(図書館の様子)

新館の紹介



新聞コーナー



6 提案授業〔小学校部会〕

○第1学年 生活科 あきのはっぴょうをしよう

○第4学年 国語科 伝えよう くらしの中の和と洋

○第6学年 社会科 「平和で豊かな暮らしをめざして」

(授業について)

主に6年生の授業を参観させてもらった。研究授業を通して、児童が調べた情報を整理したり、まとめたりするまでの指導が十分できていて関心させられた。導入では、戦後の様子とオリンピックの開催の様子を比べることにより、「高度成長により、社会や人々の暮らしはどう変わり、日本はどんな国になったんだろう」と課題を提示しての展開であった。児童は、課題に対して学校図書館や市立図書館などで調べたことや、身近な高齢者に話を聞くなどの活動で得たことを活用できていた。授業中の意見も多く、個人差はあるが、調べたことから必要な情報を取り出し自分の言葉で表現していた。また、班での話し合いや発表もスムーズに出来ていた。子どもたちが主体的に取り組むことができおり、素晴らしい授業であった。



(第6学年 社会科 授業の様子)

(分科会 1 授業研究会)



〔分科会 2〕

2－① 学校図書館の資料を活用した授業の在り方

～主体的、意欲的に学ぶ児童をめざして～〔愛媛県西条市立国安小学校〕

2－② 豊かな心を育てる読書活動

～地域とつながった読書活動をめざして～〔高知県 江南市立赤岡小学校〕

～読書を通して人と関わり 心を育てるために～〔香川県東かがわ市立本町小学校〕

2－③ 学校図書館と NIE の連携と協力

～知的好奇心をもつ子を育む～

〔高知県高知市立初月小学校〕

～図書館で NIE を～

〔徳島県徳島市応神小学校〕

7 大会に参加して

辻小学校の図書館研究大会の発表の次の大会ということで興味を持って参加させてもらった。中村小学校も、平成 24 年 3 月に完成した新校舎で県産木材をふんだんに使った校舎であった。学級数は 13（2 は特別支援学級）児童数 267 名の学校で教室の外の廊下が広くて、いろいろな掲示や学習の場として使われていたのが印象的であった。

平成 21 年度からの国語科を中心にした研究により、学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実することに取り組んできたことが、提案授業にも生かされていた。

中村小学校の 24 年度からの取り組みは、単元を貫く言語活動を明確にした単元構成を作成し、児童が、単元を通した目的やゴールイメージをもって「好きな場面」「印象に残ったこと」など主体的な意識を生かし、毎時間の学習が言語活動につながっていることを意識して主体的に学ぶことができる単元構成で授業を行っていた。

図書館教育と密接なつながりのある国語科の授業を中心に研究が展開されていたが、授業の課題を明確にすることができたことで、授業改善にもつながったのではないだろうか。また、研究協議で明らかになった成果と課題を目に見える形で文章化して、日々の授業に生かすことなど役立っていると思われる。

児童の学習や生活の中に読書習慣を根付かせるためには、読書環境を整えることと本を手にする〈情報を得ようとする〉時と場を設定することが重要であると感じた。それは必ずしもお金をかけるだけではなく、子どもを取りまく教員や家族、地域の人々の創意と工夫による働きかけが大きいと思う。常に、子どもを本に親しませたいという思いを学校と家庭、地域が共有することの大切さを四万十大会でも再認識した。

V これからの学校図書館の課題〔在り方〕

平成26年度「学校図書館の現状に関する調査」によると司書教諭の発令状況では、全体の小学校の66.2%〔12学級以上の学校は98.4%〕である。学校司書の配置状況においては、全小学校の55.4%となっている。図書等の整備状況調査によると蔵書冊数が図書標準達成学校数の割合が、小学校で60.3%中学校で50.0%となっている。また、学校図書館に児童生徒が使用可能なコンピューターを整備している学校の割合は、小学校で39.6%中学校で37.6%となっている。学校図書館に新聞を配備している学校の割合では、小学校36.7%中学校31.8%となっている。小規模校の多い三好郡・市においては、司書教諭の配置や図書館の物的整備など厳しいものと思われる。

しかながら、規模に関係なく学校の図書館は「読書センター」として、子どもたちにとって使いやすく居心地のいい場所にすることが大切である。そのための図書館の環境整備も必要である。子どもたちの希望の本が足らなければ、市の図書館から借りることもできる。読書が好きになるような活動を取り入れたり、読み聞かせや読書タイムなどの時間を作ったりもできる。そうすることにより、学校における読書活動を工夫し多様に展開することが大切である。

もう1つの機能として「学習・情報センター」として授業などの学習で図書館を利用していくことである。ただ、調べる事柄によっては、資料となる本が不足してくることも考えられる。学校に司書教諭がいれば相談もできるが、実際問題、そんな学校は少ない。授業の展開に必要な本を準備するのも大切である。そんな時は、公立の図書館に必要な本をまとめて予約して貸し出してもらうことができる。課題を追求できるだけの本や資料があれば楽しい授業ができ、子どもたちも満足できるはずである。子どもたちの調べたいという意欲を支えることができる。また、学習課題によってはインターネットを使って、今の現状に近い情報を調べたりする必要も出て来るであろう。「学び方を学ぶ場」としての学校図書館の整備を進めていく必要がある。

最後に、学校図書館の教員サポート機能を充実させることである。教員が作成した指導案や児童生徒が主体的に調べて作成した学習の成果物等の資料を蓄積し、活用できるようにする。教員用の研究スペース・設備もできると良いであろう。これからの子どもたちの「読解力」の向上・言語力の育成や言語活動の充実を図るためにも、授業ににおける学校図書館の活用を拡大していくことが重要となっている。児童生徒の「読書センター」及び「学習・情報センター」としての機能を高めていくために教員の創意工夫により図書館運営を充実し教育活動の充実や、学校図書館のより一層の機能向上が、ますます重要となってきたと思う。

研究主題

児童・生徒の生活環境の改善を目指して ～ネット端末（スマホ等）の使用時間を見直して～

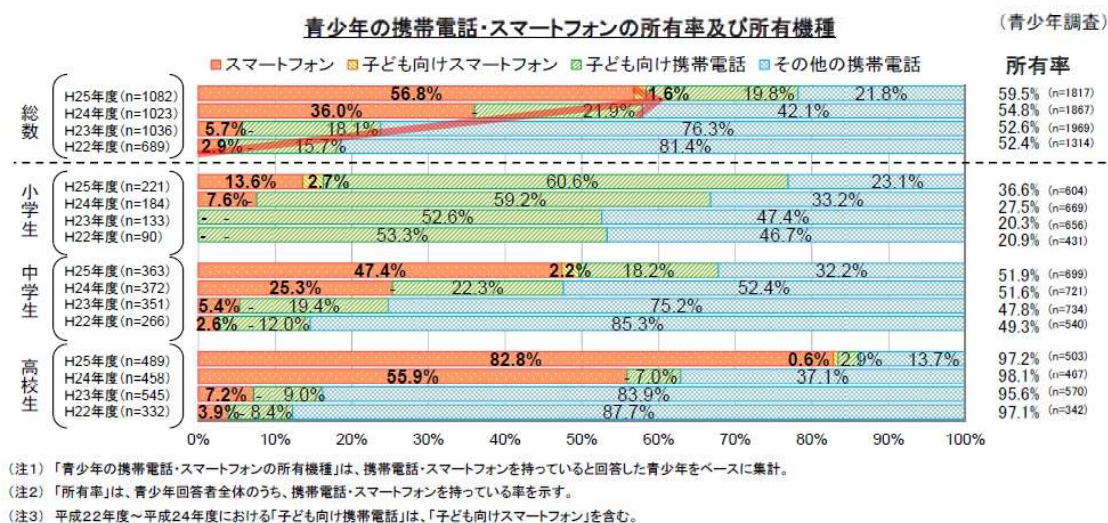
三好教育研究所 研究員 井川秀樹

1 はじめに

2008年以降、我が国でもスマートフォン等のネット端末が急速に普及し、子どもだけで、何時でも何処でも無制限にインターネットに接続できるようになってきた。これらの普及は社会生活全般の利便性を高め、いろいろな分野で有効活用されているが、その一方で、遊びや人間関係、生活習慣の面で大きな変化をもたらしている。特にスマートフォンを長時間利用することによる、睡眠不足による体調不良、家庭学習不足による学力低下などは教育現場においては大きな課題となってきた。

スマートフォン等のネット端末の使用方法と時間を見直すことが生活習慣の改善につながり、家庭学習の定着や学力の向上、健康の維持につながっていくと考えこの課題を設定した。

2 最近の子どもを取り巻く生活実態と課題（問題点）



H26.2 内閣府 青少年のインターネット利用環境実態調査結果（速報）より

調査結果から、小中高生が所有する携帯電話・スマートフォンの占める割合は、中学校では約5割、高校生では8割を超えていることが分かる。総数を見れば24年度以降に急増してきたのが分かる。また、小学生の所有率が近年急激に上がっており、低年齢化の傾向が見られる。

スマートフォンや携帯電話の普及により生活は便利になった反面、子どもたちの生活環境への影響も出てきている。

生活の実態と課題

- ・スマートフォン等携帯電話の所有割合やインターネットとの接続時間が急増している
- ・夜型生活によって睡眠時間が不足している。
- ・朝食の欠食が増加している。



不適切な睡眠習慣が子どもたちの心身の与える影響

- ・朝食欠食による学校生活への影響
- ・家庭学習時間の確保と学力の低下の問題
- ・非行、不登校、ひきこもりなどの問題行動等のリスクの増加

3 学習や生活習慣との関係

(1) 家庭学習や学力への影響

文部科学省は2014年度の「全国学力・学習状況調査」の結果を得て、学習習慣・生活習慣やメディア接触状況と学力の関係を指摘している。例えば、朝食を毎日食べる児童・生徒ほど学力テストの平均正答率が高い。また、携帯電話スマートフォンの利用時間が短い児童・生徒ほど学力テストの平均正答率が高い傾向がみられるとしている。

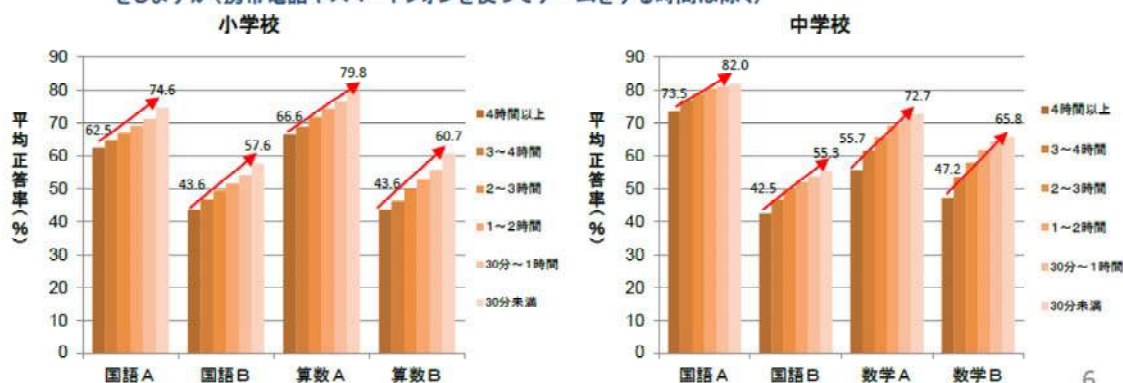
この調査結果では、平日に携帯電話やスマートフォンで通話・メール・インターネット（ゲームは除く）を1日1時間以上している児童・生徒の割合は、小学校で15.1%，中学校では47.6%だった。（携帯電話やスマートフォンの所持率は児童・生徒の割合は、小学校で54.0%，中学校で76.9%）

学力テスト結果との関係を見ると、例えば中学校の「国語A」では、利用時間が30分未満だった生徒の平均正答率が82.0%だったのに対し、4時間以上だった生徒では73.5%だった。他の科目や小学校の各科目でも、利用時間が短いほど平均正答率が上がる（利用が長時間になればなるほど平均正答率は下がる）という傾向が出ている。

このような傾向はあくまでも「相関関係」示したものであり、必ずしも「因果関係を」示したのではないことに留意しておく必要があるが、長時間の使用により家庭学習時間が確保できない事や「ながら学習」により学習効率が上がらないことなどは現実の課題であり、使用時間の改善は必要な事であると感じる。

○児童生徒の学習・生活習慣と学校の平均正答率との関係

図表1 普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをしますか(携帯電話やスマートフォンを使ってゲームをする時間は除く)



★平日1日あたりの携帯電話・スマートフォンの使用時間（ゲームを除く）と学力テストの平均正答率との関係（国立教育政策研究所「平成26年度全国学力・学習状況調査の結果について（概要）」より）

（参考までにこんな記事がありました）

徳島新聞 平成27年5月23（土）

英ロンドン大経済政治学院の研究チームがスマートフォンなどの携帯電話を学校に持ち込むことを禁じると、成績が低い生徒の学力が大きく向上するという調査結果をまとめた。「持ち込み禁止は学力格差を縮めるのに有効だ」と結論づけている。携帯電話により集中力が乱されやすいと分析している。（調査はロンドンなど国内4都市で16歳の生徒約13万人を対象に、義務教育終了時の全国統一試験の成績を分析している。なお、英国での携帯電話の所持率は13歳以上で9割超である。）

（2）生活への影響

【スマートフォンが子どもの寝不足を誘発】

文部科学省が4月30日に公表した小中高生の生活習慣に関する全国調査で、情報機器が就寝時間に与える影響が明らかになった。

携帯電話・スマートフォンを利用してメールやインターネットを見ていない中学生の85%が午前0時前に寝るのに対し、1～2時間の場合は78%、3～4時間では64%、4時間以上利用する人の場合は47%と、使う時間にはほぼ比例して就寝が遅くなっている。

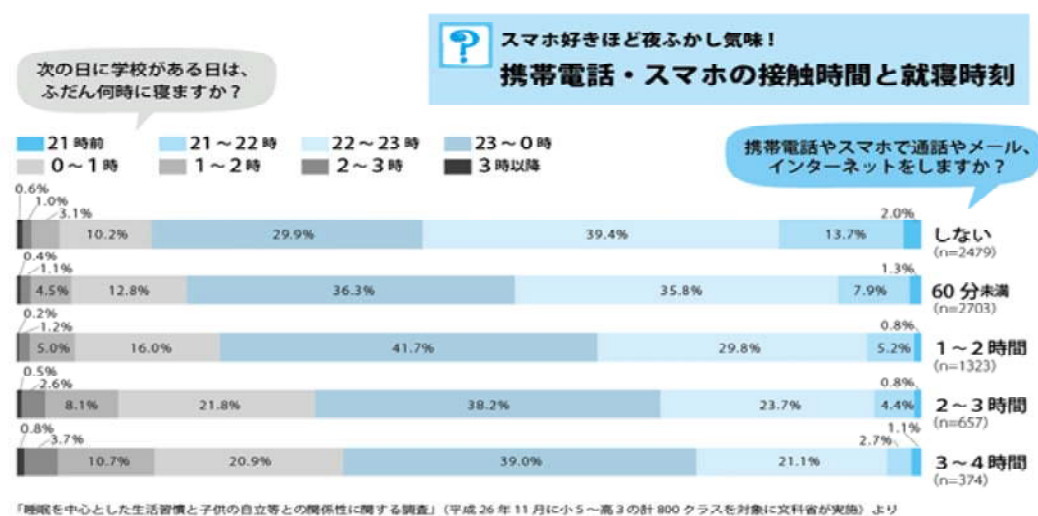
テレビやパソコンなどを含む情報機器に就寝まで接する日が「よくある」とした中学生の78%は「朝、布団から出るのがつらい」と答え、接しない生徒でつらさを感じているのは61%だった。これらの傾向は小中高の合計でも同様の結果である。

（下図参照）この結果から、携帯電話やスマートフォンの長時間利用による生活習慣への影響が考えられる。（寝不足による日常生活への影響→朝食の欠食や非行不登校、引きこもりなどの問題行動へつながるリスクが高くなる。）

※スマートフォンやパソコンなどの画面から出る青色光（ブルーライト）を夜間に浴びると体内時計が狂い、睡眠の質も悪化するとの懸念もある。

【小学生の視力の低下】

文部科学省の2015年度学校保健調査で、幼稚園から高校まで裸眼視力が1.0未満の子どもは増加の傾向で、特に小学校の割合は30.97%。1979年の調査開始以来、過去最高となったことが分かった。文部科学省はこの結果をスマートフォンやパソコンなどで近くを見る機会が増えたことが、少なからず関係しているのではないかと分析している。



4 実践（スマホの利用時間の見直しと生活改善）

◎ 取り組みの前に考えたポイント

- ①まず最初に、自分たちの生活を見つめ直すことから始めて、生活習慣についての意識を高める。そして、自分自身の課題を見つけ、改善のための具体策を考えさせる。
- ②教師や保護者の考え方の一方的な通知では、児童生徒には浸透しないと考え。生活上の悩みや問題を具体的に示して問題提起をし、自主的に考え見直す児童生徒の主体的な取り組みにしていく。
- ③児童生徒はスマートフォン等をあらゆる機会にあらゆる場所で使用する。そこで、学校（学級）と家庭、地域が児童生徒の実態と問題点を共通理解し、問題の解決に向けて共通実践していく。

中学校第1学年特別活動（学級活動）学習指導案

1 題材名「スマートフォンやパソコン等の長時間使用の心身や生活への影響について」

2 題材について

（1）ねらい

携帯電話やスマートフォン，ネット端末の普及により，家庭でも気軽にインターネットを利用できるようになってきた。そのために中学生がインターネットを長時間利用することが原因で，遅刻や欠席，授業や部活動へのやる気の欠如と思われる場面が増えてきている。学校生活だけでなく日常生活，さらには健康に支障をきたすことも少なからず見られる。そうした問題を未然に防ぐためにも，自分の健康や社会生活について意識しながら，自己管理と適切なインターネットとの関わり方を主体的に実践できるようにするために題材を設定した。

（2）生徒（学級）の実態について

事前のアンケート結果は以下の通りである。

○スマートフォン等のネット端末機器を持っていますか？

自分専用 60% 家族と共用 20% 持っていない 20%

○スマートフォン等のネット端末機器の合計使用時間はどのくらいですか？

（平日）0～1時間 35% 1～2時間 40% 2～3時間 20% 4～時間 5%

（休日）0～1時間 20% 1～2時間 50% 2～3時間 20% 4～時間 10%

○長時間使用したときに困ったことや生活に影響を与えたと感じたことはありますか？（具体的に例をあげて教えてください。）

- ・視力が落ちた
- ・睡眠時間が短くなり，朝起きにくくなった。（昼夜逆転した）
- ・朝の時間が遅くなり，朝食を抜くときが増えた。
- ・宿題をする時間が足りなくなった。（家庭学習の時間を確保できない）
- ・遅刻が増えてきた。
- ・読書をしなくなった。
- ・家族と話す時間が前よりも減ってきている。

- ・友達からの連絡が気になって学習に実が入らない。
- ・学校に行っても眠くて集中力が続かない。
- ・友人関係でトラブルに巻き込まれた。
- ・学校で話したり，会話することがめんどくさくなってきた。

○保護者が使用させてもよいと考えている時間

(平日) 0～1時間	70 %	1～2時間	25 %	2～3時間	5 %	4～時間	0 %
(休日) 0～1時間	55 %	1～2時間	30 %	2～3時間	15 %	4～時間	0 %

- ・自分専用のスマートフォン等のネット端末機器を持っている割合は高い。
- ・平日でも2時間以上使用している生徒が25%とかなり高い。



使用時間が増えて日常生活や学習状況に影響が出始めてきた。

(3) 指導にあったって

- ア 家庭でのスマートフォン等ネット端末機器の使用について現状や保護者の考えを，事前アンケートで調査し，これからの利用の仕方のにしてい。参考にしていく。
- イ 生徒の興味や関心を高め，問題意識を持たせるために自分たちのアンケートの結果を活用する。
- ウ 意見や考えをたくさん出し，意見や考えを深めるためにグループによる話し合いの場を設定する。

(4) 情報モラル教育の視点

- ア 情報化社会で安全・安心に生きるための知識，正しい判断力，実践力を身につけさせて，関連を重視した指導を展開する。
- イ ネット依存の症状や生活への影響について詳しく理解し，そうならないようにするためにはどうすべきなのかを主体的に考える。

(5) 人権教育の視点

話しあいの中で，相手の立場や意見を尊重する態度を養い，周囲に流されないで自分の意見を発表できる力をつけていく

3 本時の学習

(1) 目標

スマートフォン等のネット端末の長時間使用による心身や生活への影響について理解

し、適切に使用する態度を養う。

(2) 展開

	学 習 活 動	発問や支援 指導上の留意点及び評価	備 考
導 入	1 事前のアンケートの結果を考察する。 ・平日の使用時間のグラフを見る。 ・休日の使用時間のグラフを見る。	○生徒のネット端末の使用時間の実態と保護者の考える使用時間に大きな違いがあることを理解させ、その理由について考える。	アンケート調査結果
スマートフォン等のネット端末の使用について考えよう。			
展 開	2 日常生活を振り返り、具体的な場面を思い出す。	○ネット端末をついつい長時間使ってしまうのはどんなときかを考えさせる。 (長時間使う場面を発表する。) ○ネット端末を長時間使用した場合、心や体に与える影響について考えさせる。 ・ネット依存について考える。 (簡単なチェックシートを行い自分の状況について理解させる)	チェックシート (資料下)
展 開	3 長時間使用したときの悪影響についてワークシート記入し、発表する。 ・生活や健康、学習との関連について考える。 ・心身などへの影響を考える。	[評価1] (ワークシート) ・使い方のきまりを自分で3つ作ることができる (基準) [評価2] ・これからどのように使っていくかを理由を考えて3つの決まりを作ることができていた。(発展) ※評価1 (基準) に達していない生徒への手立て	ワークシート

	4 使用時間を決める(時間を減らす)ためにはどのようにすればよいかを考える。	・自分自身の生活を振り返らせて生活への影響について考えさせる。 [評価3] ・他の人の意見を聞いて、自分の考えを修正できていた。	
	5 本時のまとめ	○ネット端末の長時間使用と家庭学習時間について知らせる。 ○インターネットの利用は生活に有用な道具であるが、使用方法(時間)によっては危険があり、自分自身で関わり方を考え、管理することが大切であることを知らせる。	

(資料)

このチェックシートは、自分が意識していないところで依存しているということを考えさせ、理解を深めるために行いました。(依存症のチェックではありません)

ネット依存チェックシート)

- ☐ 常にメールやコミュニケーションアプリが気になる。
- ☐ 気がつくとネットにつないでいる。
- ☐ 家族や友人といってもスマホ(ネット端末)を使う。
- ☐ スマホ(ネット端末)がないと不安になる。
- ☐ 食事中や勉強中(家庭学習中)もスマホ(ネット端末)をしている。
- ☐ スマホを握ったまま寝てしまうことがある。
- ☐ 何処に行っても、WI-FI環境が気になる。
- ☐ スマホの使用時間が平日に3時間をこえている。

○授業後の生徒の感想

- ・自分自身のスマホの使用時間なんて考えたこともなかった。
- ・知らず知らずのうちに使ってしまう、就寝時間が遅くなっている自分に気づいた。
- ・部活動で帰るのも遅いので、時間の使い方を考えるよい機会になった。
- ・スマホの使用時間を減らします。
- ・宿題を済ませ、スマホも少しして12時までには就寝するように頑張ります。
- ・今は時間を減らしたいと思っているが、自信はない。

- ・メールやコミュニケーションアプリを友だちが時間を減らすなら私も減らす。
- ・言うだけならまた同じ事になるから、ルールを決めたい。
- ・みんなでルールを決めたい。
- ・ルールを作るなら自分のことなので自分で決める

授業後の子どもたちの意見の中に、自分たちの生活環境の改善のために、スマホの使用時間を見直し、自分たちのルールを考えようという意見が多く見られた。そこで、学級活動の時間に委員長を中心にして話し合いを行った。

子どもたちが考えたルール

(各自で考え、班で話し合い→班でまとめて発表→全体でまとめる)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ☐ 使用時刻だけでなく一日の使用時間を決める。 ☐ 自分の部屋に持ち込まない。 ☐ 居間やリビングに充電器を置き、使用しない時はそこへ置く ☐ フィルタリングをかける。 ☐ 学校へは持っていない。 ☐ テスト週間、テスト期間中は使用しない。 ☐ 家族、友だち、先生などと一緒にいるときは使わない。 ☐ 相手に大事な事を伝えるときは直接伝える。 ☐ 使いながら歩いたり、自転車に乗ったりしない。 ☐ 場所を考えて使用する。 ☐ ルールを守れなかった時は、一定期間は使用禁止。 ☐ 目的を決めてメールやコミュニケーションアプリを使用する。 ☐ 家庭学習が終わった後でしか使用しない。 ☐ 夜10時以降の使用はしない。 ☐ 知らないメールは開封しないで削除する。 ☐ スマホの保管、充電場所は居間にする。 |
|--|

【生活習慣見直しのための常時指導として】

〈チェックシートで生活習慣の見直し〉

生活環境についての意識を持たせ、自主的に考えて行動できる生徒を育成するために生活チェックシートを学級で定期的に行い、学級活動等で話し合い改善した。また、個別に面接を行い、改善方法や手立てについて支援した。

生活見直しチェックシート

年 月 日 () 実施

日々の生活を振り返って、あてはまる事項の□にチェックを入れてください。

〇〇中学校 1年〇組 名前 ()

①睡眠や体調についてのチェック

- ☐ 0時以降に就寝することが多い。
- ☐ 起床時間に自分で起きられないことが多い。
- ☐ 起床後に食欲がない。
- ☐ 起床後頭痛やすっきりしない日が多い。

②食事や栄養についてのチェック

- ☐ 時間がないので朝食を食べない日が多い。
- ☐ 朝食時間は5分以内である。
- ☐ 自分の好きなものばかりを食べる。
- ☐ 食事中家族と会話をあまりしない。

③日常生活についてのチェック

- ☐ 体育の授業以外には運動をほとんどしない
- ☐ 忘れ物をする日が多くなった。
- ☐ 遅刻をした日があった。(起床が遅れた原因)
- ☐ 授業中に眠い時がよくある。(眠くて集中力が持続しないも含む)

④心の健康についてのチェック

- ☐ 現在悩み事や心配事がある。
- ☐ 落ちつかず、イライラする時がよくある。
- ☐ 学校が楽しくない。
- ☐ 何事にもやる気がわからない。

⑤家庭学習についてチェック

- ☐ 課題(宿題)を忘れる日があった。(体調不良の日は除く)
- ☐ 課題(宿題)を朝の時間にすることがあった。
- ☐ 〇〇(連絡ノート・日記)を朝の時間に書いたことがあった。
- ☐ 課題を朝読の時間にすることがあった。

家庭との連携（啓発）

子どもたちの生活習慣の改善を実行に移し、成果を収めるためには家庭（保護者）と連携した取り組みが大切である。学級通信や参観授業等で取り組みを紹介し、理解と啓発を行った。生徒の多くは、家族でスマートフォンの使用時間や生活習慣について話し合い、家庭のルールを決めた生徒もいた。また、子どもたちの意識の向上とともに、保護者の意識も少しずつ変わりつつあると面談等の会話から感じた

（保護者の意見）

- ①調査で子どもたちの使用時間の長さに驚いた。
- ②長時間使っているとは思っていたが、何も言っていなかったのでよい機会になった。
- ③何とかしたかったので、よかった。
- ④自分もよく使用しているので考えたことがなかったが、これからは家族で見直していきます。
- ⑤便利でこれからの生活に欠かすことはできないので、自分で考えて使える力をつけてほしい。
- ⑥子どもの意見を中心に我が家のルールを決めたが、実行に移せるかはまだ分からない。

○今回は学級の取り組みであり、全家庭でのルールづくりまでは、計画できませんでしたが、参考資料として

〈家庭でのルール作り〉

ルールを決める時のポイント

- ①一方的な押しつけにならないように必ず子どもと話し合いながら決める。
- ②実際に身近で起こっている問題などを話しあい、ルールを作ることの必要を理解させる。
- ③意識付のためにルールを作ったら見えるところに掲示しておく。
- ④ルールをしばらく続けたら、見直す話し合いを行う。
- ⑤守れなかったときにどうするか決めておく。

5 研究の成果

- ①実践を深める中で、生活習慣の改善が自分たちの生活を向上させると考える生徒が増えてきた。
- ②スマートフォンの使用時間だけでなく、あらゆるケースで時間を有効に使おうという考えが出てきた
- ③生活チェックシートのチェックが少なくなった。
- ④保護者の意識の向上
- ⑤クラスの取り組みが、生徒会全体へと広がりつつある。

6 研究の課題

- ①近年は小学生のスマートフォンの所有率が急速に上がっており、小中高の一貫した取り組みが必要であり、今まで以上の連携が求められている。
- ②学校と家庭が実態と問題点・改善点を共通理解し、実践していくことで効果がでる。ただ、保護者の意識に開きがあるので、浸透していかない生徒の指導が課題である。
- ③全国では自治体や生徒会が「脱スマホ宣言」を行い、ルールを制定した地域（学校）があるが、まだ十分には機能していないようである。ルールの浸透には、家庭の理解と協力、そして一番に生徒自らの意識をさらに高めていくことが必要であると改めて感じた。
- ④今後は、行政、学校、PTA、生徒会、地域を含めた実践が望まれる。

今回はスマートフォン所有者が中心の取り組みであったが、所持していない生徒の生活習慣にも問題はあったことが分かった。生活習慣は、充実した学校生活や学力の向上の根本をなすものである。今回明らかになった課題の解決を目指し、さらに研究・実践を進め、子どもたちの生活習慣の改善に向けて努力したい

〈参考資料・参考文献〉

- ・『事例で学ぶ Net モラル』（広教株式会社）
- ・『学校で取り組む情報社会の安全安心』（三省堂）堀田龍也・平松 茂 編著
- ・『中高生を中心にした子どもの生活習慣づくりに関する検討委員会』における審議の整理（26.3 中高生を中心にした子どもの生活習慣づくりに関する検討委員会）
- ・『徳島新聞朝刊』（27.4. 30, 27.5. 23、28.1. 23, 28・.2. 18）
- ・『2014 全国学力・学習状況調査報告書』（2014.8. 25 文部科学省）
- ・『青少年のインターネット利用環境実態調査結果』（26.2 内閣府）

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年 度 (平成)	内 容
30	元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして 一学校・家庭・地域が一体となって一 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」 一ふるさと意識を高めるために一 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成 一ボランティア活動を通して一 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 一同単元類似内容の指導の試み一 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ 一児童・生徒の理解と援助のために一 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	2	ふるさとの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道徳教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画 一平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試み一 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して 一コミュニケーション能力の育成のために一 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	3	主体的な生活を促す幼稚園教育 一人とのかかわりをとおして一 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動 一たて割り班の活動を通して一 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 一進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指して一 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか 一学校行事などの活動を通して一 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動 一学習意欲を高める理科の指導一 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 一個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通して一 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究 一性教育の実践を通して一 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して 一体験的活動を通して一 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導 一行書を活用した筆写活動の日常化をめざして一 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子

集	年 度 (平成)	内 容
34	5	健康でたくましい子どもの育成をめざして ー主体的に取り組む活動ー 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 ー一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習ー 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成 ーボランティア活動をととしてー 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代 奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめるー私案 ーピース・メッセージの実践を通してー 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代
35	6	地域に開かれた学校づくり ーすこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事ー 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み ー教科、特別活動の実践を通してー 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 ー家庭科ー 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子
36	7	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考えるー 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして ー「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組みー 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 ー体験学習・ボランティア活動を通してー 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして ー自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援ー 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指してー中学1年生への意識調査と実践例ー 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子
37	8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 ー施設訪問を通してー 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 ー「何について」「どのように」「どこまで」指導するかー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代

集	年 度 (平成)	内 容
38	9	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境をどのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切にし、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して ー積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成ー 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不適応問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 ーある不登校児とのかかわりを通してー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
39	10	身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために ー地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成ー 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は？ ー三好郡内小中学生意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子
40	11	魅力ある幼稚園教育の創造（三好町三園の取り組み） ー生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成ー 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 ー名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通してー 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 ー「選択の時間」を生かした取り組みの中でー 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子
41	12	「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ 自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 ー地域の特性を生かした取り組みの中でー 池田第一中学校 教諭 立花 久 三好郡における情報教育の現状とその考察 ー郡内小中学生・教職員の意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子

集	年 度 (平成)	内 容
42	13	「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 ー幼児が自ら生活していくための教師の役割ー 白地幼稚園 教諭 木徳 友子 「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 ーへき地の特性を生かした様々な体験活動をとおしてー 東山小学校 教諭 高篠 佳子 生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道 T T授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料 (平成12年度・13年度)から中学校数学におけるT T授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵
43	14	豊かな感性をはぐくむ教育の創造 ー金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美 数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 ー学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワークー 三好郡ネットワークセンター I C T コーディネータ 中川 斉史 生藤 元
44	15	生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 ー身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかわればよいかー 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子 「生きる力」を育む総合的な学習 ーふるさとを愛し、人や自然と積極的にかわろうとする児童の育成をめざしてー 出合小学校 教諭 岡 佳子 「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史 「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について ー人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるためにー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 生きる力をはぐくむ教育の探求 ー「本との出会い」をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美
45	16	ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵 『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校 「みる力」を育てる美術教育 ー美術の基礎・基本をみつめてー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元

集	年 度 (平成)	内 容
46	17	幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、 幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック三野町・三加茂町幼稚園研究グループ 地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝 地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐 三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元 文字式の指導に関する研究 ー1年文字式における生徒の理解の仕方についてー 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵
47	18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 ー主体的により良く伝え合う力の育成をめざしてー 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 ー共に生きる町づくりについて考えようー 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	19	「健全な心身の成長をめざして」ー高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながらー 第2ブロック三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」 自らの食生活に関心を持ち、すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 ー学校・家庭・地域の連携した取り組みー 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために ープレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用ー 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」ー何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析をー 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 ー子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えようー 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 ー評価活動におけるマークシートの利用ー 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 榎生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 ー『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心としてー 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 ー構成的グループエンカウンターを考え方を生かしてー 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹

集	年 度 (平成)	内 容
50	21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして 一人やものとかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる－ 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 －習得型学力から活用型学力へのステップ－ 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 －小・中における英語教育の連携を目指して－ 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるＩＣＴ活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 一人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求－ 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 －実物投影機利用意図の可視化を通して－ 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 －三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 －小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」－ 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 －学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして－ 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 －「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして－ 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 平成２３年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 －グループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり －小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び－ 東祖谷小学校 教諭 森永 直美 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 －ＥＳＤ（持続発展教育）の視点を取り入れて－ 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 －学級担任アンケート調査と研究授業より－ 昼間小学校 教諭 山口 恭史 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について 三好教育研究所 研究員 岡本 博一

集	年 度 (平成)	内 容
54	25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ～様々な体験活動を通じて、 地域の人々や同年齢、異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究～ 昼間幼稚園 教諭 佐藤 重美 地域とともにある学校をめざして ～地域の教育力を生かして育てる三庄っ子～ 三庄小学校 教諭 三好美智代 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して 三好中学校 教諭 近藤 剛 複式学級における指導の充実を目指して 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 I C T活用の推進と情報モラル教育 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
55	26	家庭や地域と手を取り合っ心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して 家庭や地域と手を取り合っ心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践～ 井内小学校 教頭 住田 克弘 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ～学校図書館を中心として～ 三加茂中学校 教諭 山下ちづる 小中連携教育～東祖谷小中学校の取り組み 三好教育研究所 研究員 岡本 博一 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ～討論活動を取り入れた授業づくり 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
56	27	自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成 ～地域との交流を通してふるさとの魅力再発見～ 箸蔵小学校 教諭 藤原 隆司 出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて ～識字学級との交流を通して～ 三野中学校 教諭 尾形 君代 「読む 知る 感じる」 読書環境をめざして ～学校図書館教育の実践と課題～ 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 児童・生徒の生活環境の改善を目指して ～ネット端末（スマホ等）の使用時間を見直して～ 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹